

公益財団法人明日佳 パラスポーツ研究成果報告書 2024 (No.8)

Journal of Parasports Research Vol.8



スポーツ基本法（平成23年法律第78号）（前文）

スポーツは、世界共通の人類の文化である。

スポーツは、心身の健全な発達、健康及び体力の保持増進、精神的な充足感の獲得、自律心その他の精神の涵(かん)養等のために個人又は集団で行われる運動競技その他の身体活動であり、今日、国民が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む上で不可欠のものとなっている。スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利であり、全ての国民がその自発性の下に、各々の関心、適性等に応じて、安全かつ公正な環境の下で日常的にスポーツに親しみ、スポーツを楽しみ、又はスポーツを支える活動に参画することのできる機会が確保されなければならない。

巻 頭 言

昨年、第8回小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会で優勝した北海道札幌あいの里高等支援学校は、第3回全国特別支援学校フットサル大会名古屋大会で準優勝の成績を残しました。ゲームを応援していましたが、「あと少し」のところで優勝を逃してしまいました。

スポーツでは、この「あと少し」を乗り越えるために、児童生徒一人一人が自覚をもって、自ら考え、具体的に工夫改善を行うことが重要になります。教師の皆様方も

児童生徒に「あと少し」のところを乗り越えさせるための工夫改善が求められます。本道の特別支援学校教師の皆様方が児童生徒の個々の障害の状況や特徴等をよく吟味して、スポーツ活動がより一層充実するように、「あと少し」の頑張る姿を期待しております。

さて、当財団は発足当時より本道の特別支援学校や特別支援学級で学ぶ児童生徒のスポーツ活動を応援することを目的に活動して参りました。事業としましては、スポーツ用具の寄贈のほか、特別支援学校生徒を招待して開催したフットサル大会、さらにスポーツ活動にかかる実践研究を行っている学校・教師の皆様方への研究助成を積極的に展開して参りました。

本研究成果報告書は令和6年度に研究助成した実践研究のまとめであります。各論文とも児童生徒個々の特性をよく理解し、その上で指導内容・指導方法を工夫し、計画―実践―評価を繰り返して得た貴重な知見であり、教育上の財産であると言えるものです。報告書の文面や写真から児童生徒が抱く成就感・達成感が目に見えるものと思います。

障がいのある児童生徒の教育に携わる教師の皆様をはじめ、普通教育や療育の場で活躍される皆様にも是非ご一読いただきたい報告書です。パラスポーツに携わる全ての皆様のご参考になれば幸甚に存じます。



令和7（2025）年3月

公益財団法人明日佳 理事長 小野寺 眞悟

目次

巻頭言	公益財団法人明日佳 理事長 小野寺眞悟	
特別寄稿	小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会の歩み 公益財団法人明日佳 理事長 小野寺眞悟	1
論考1	第3回全国特別支援学校フットサル大会 公益財団法人明日佳 事務局長 鈴木 重男	4
論考2	運動動作の習得と「コツ」に関する一考察 公益財団法人明日佳 事務局次長 松下 高広	6
論文1	病弱児童生徒のベースボール型球技の実践について ～体験的な活動から主体性の向上を目指して～ 北海道手稲養護学校三角山分校 教諭 梅野 綾人	10
論文2	陸上競技を通じた地域社会や他者との関わり ～陸上競技部の指導実践～ 北海道紋別高等養護学校 教諭 我妻 大介	16
論文3	特別支援学校におけるサッカー部の現状と課題 ～第2回全国特別支援学校フットサル大会への参加を通して～ 市立札幌みなみの杜高等支援学校 教諭 明杖 子竜 教諭 金子 裕 教諭 藤本 望	22
論文4	キャリア教育の視点から見た部活動の実態 ～本校での学びを将来の暮らしへどのように活かしていくか～ 北海道札幌稲穂高等支援学校 教諭 永易 健太	29
論文5	知的障害のある生徒の運動における「動作の意識性」へのアプローチ ～ICTを活用した運動技能の習得～ 北海道千歳高等支援学校 教諭 菅 英登	36

小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会の歩み

公益財団法人明日佳 理事長 小野寺 眞悟



I 小野寺眞悟杯の願い

公益財団法人明日佳が主催する標記大会は表1のような共催、後援等をいただく中、令和6年度で第8回大会を迎え、全国大会は第3回を数えた。

スポーツには元気、協力・協調の精神、そして向上力を養う力があることを踏まえ、障害のある子ども達がスポーツの力を糧として学校卒業後も地域の中で働き、円滑・円満で楽しく豊かな生活をしてほしいと願って本大会を開催して来た。この間、コロナ禍のため2年連続して大会は中止となったものの、コロナ明けの令和4年度には念願であった全国大会を開催するに至っている。

小野寺眞悟杯の願いは、大会共催をいただいている公益財団法人日本ライオンズの大会基本コンセプト「自立とRESPECT」(後段に記載)に具現化されている。

＜表1 大会の主催等＞

主催	公益財団法人明日佳
共催	公益財団法人日本ライオンズ
後援	スポーツ庁 全国特別支援学校長会 北海道教育委員会 江別市 江別市教育委員会
主管	札幌北の杜ライオンズクラブ エスポラダ北海道
協力	医療法人明日佳 社会福祉法人明日佳 社会福祉法人長沼陽風会 北海道特別支援学校長会

II 競技規則

本大会で特筆されることは、競技中における選手(生徒)へのコーチングの禁止である(表2)。選手が監督やコーチの指示で試合をするのではなく、あくまで選手の自主的・自発的なプレーを期待してのことである。

＜表2 競技規則抜粋＞

⑩監督のみ、「交代指示及び身体等の危険・緊急時の指示」のコーチングを許可する。したがって、通常のゲーム中においては、監督及びコーチ等によるコーチングは本大会の主旨により、原則、禁止とする。

選手もこのことをよく理解しており、日頃から自主的なプレーを目指した練習に努めている。

III 大会の歩みと次年度の開催概要

本論考では、過去の大会の成績を振り返り、また令和7年度の開催要項(概要)を併せて記載して、これまでの歩みとして記録に残しておくこととする。

(1)全国大会

公益財団法人日本ライオンズの主催で全国特別支援学校フットサル大会が令和4年度より開催された。地区予選は全国12地区で開催され、年々、参加校数が増加して来ている。

次年度は東京都で開催予定である。

第1回(令和4年) 地区予選 70校

札幌市 北ガスアリーナ

第2回(令和5年) 地区予選 111校

福岡市 アクシオン福岡

第3回(令和6年) 地区予選 122校

名古屋市 中村スポーツセンター

第4回(令和7年) 予定

東京都 東洋大学赤羽台キャンパス

(2)北海道地区大会

第3回全国大会では市立札幌あいの里高等支援学校が準優勝に輝いた。北海道のフットサルの高い実力を発揮してくれたものと誇りに思うところである(詳細は「論考1」を参照のこと)。

【謝辞】

表1にある各機関、団体の皆様、特別支援学校職員の皆様、さらに札幌フットサル連盟の皆様には、大会運営に当たり多大なるご支援をいただいております。この場をお借りして心よりの感謝を申し上げます。

小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会の大会履歴

回／年度	参加校数	優 勝	準優勝	第3位
第1回 (2017年)	16校	白樺高等養護学校	高等聾学校	札幌豊明高等支援学校 韓国安東永明学校
第2回 (2018年)	I 5校 II 21校	平取養護学校ペテカリの園分校 新篠津高等養護学校	帯広養護学校 高等聾学校	南幌養護学校 今金高等養護学校
第3回 (2019年)	I 4校 II 23校	帯広養護学校 新篠津高等養護学校	平取養護学校ペテカリの園分校 今金高等養護学校	南幌養護学校 札幌あいの里高等支援学校
第4回 (2020年)	新型コロナウイルス拡大の為 大会の開催を中止			
第5回 (2021年)	新型コロナウイルス拡大の為 大会の開催を中止			
第6回 (2022年)	I 1校 II 14校	帯広養護学校 中札内高等養護学校	札幌あいの里高等支援学校	新篠津高等養護学校
第7回 (2023年)	I 1校 II 18校	星置養護学校ほしみ高等学園 市立札幌みなみの杜高等支援学校	中札内高等養護学校	高等聾学校
第8回 (2024年)	I 2校 II 18校	平取養護学校 札幌あいの里高等支援学校	星置養護学校ほしみ高等学園 市立札幌みなみの杜高等支援学校	中札内高等養護学校

※「参加校数」欄 I：カテゴリーⅠ II：カテゴリーⅡ

第9回小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会 兼 第4回全国特別支援学校フットサル大会北海道地区大会 開催要項 概要

1 目 的	本大会は、特別支援学校生徒がフットサルを通して、日々、鍛錬してきた成果を踏まえ、自校生徒間のチームワークを深めるとともに、他校生徒に対しては敬意の念を持ってプレーし、もって社会性を養い、就労への意欲を高めて、インクルーシブ社会の実現に向けた当事者としての成長に寄与することを目的とする。
2 会 場	北海道立野幌運動公園体育館
3 日 時	2025（令和7）年7月26日（土） 午前9時00分～午後4時00分
4 主 催	公益財団法人明日佳
5 共 催	公益財団法人日本ライオンズ
6 後援予定	スポーツ庁 全国特別支援学校長会 北海道教育委員会 江別市 江別市教育委員会
7 主 管	札幌北の杜ライオンズクラブ エスポラーダ北海道
8 協力予定	医療法人明日佳 社会福祉法人明日佳 社会福祉法人長沼陽風会 北海道特別支援学校長会 公益財団法人北海道サッカー協会
9 大会日程	① 全校参加による開会式 午前 9時10分 ～ ② 予選リーグ・決勝トーナメント 午前10時00分 ～ ③ 全校参加による表彰・閉会式 午後 3時30分 ～
10 その他	① 中高等部併置校は、カテゴリーⅠに出場する。 ② 「釧路鶴野支援学校」及び「中標津支援学校」並びに「高等養護学校」及び「高等支援学校」「高等〇〇学校」は、カテゴリーⅡに出場する。 ③ カテゴリーⅠは生徒8名、引率者3名、計11名で編成する。 カテゴリーⅡは生徒8名、引率者2名、計10名で編成する。 ④ 前泊及び後泊を必要とする遠隔の学校については、札幌までの都市間バス

代金の障がい者割引往復を助成する。また、前泊及び後泊を必要とする学校には、宿舎を用意し、その費用を助成する。なお、都市間バス札幌ターミナルから指定宿舎までの間は学校負担とする。札幌市内学校及び日帰りの札幌市近郊の学校への移動費用の助成はないので、留意願うものとする。

- ⑤ 参加校は、自校生徒及び相手校生徒等への努力・敬意・勝者への称賛等を大事にする心を持つよう、各種の指導場面での留意に努める。
- ⑥ 大会参加にあたって、各学校は旅行及びスポーツ傷害保険等の加入手続きを済ませる(日本スポーツ振興センター災害共済給付に加入している場合はこれに代わるものとする)。
- ⑦ 大会当日のチーム構成員分の昼食弁当は、大会運営側で準備する。
- ⑧ 参加校は、チーム構成員の各種疾病に係る健康チェックを各自で実施する。
- ⑨ 本大会は、監督・コーチの立位及び座位でのベンチでの生徒への指示(選手交代時を除く)の一切を禁止するので、各校の日々の練習もそのような生徒の主体的行動を促す指導に努めることを求める。
- ⑩ 競技規則は、(公財)日本サッカー協会のフットサル競技規則に準ずるが、参加校の特性及び生徒の障がいの特性等に応じて、各ゲーム内において各参加校の共通理解の下、適切に運用する。例えば、聴覚に障害のある生徒が出場する場合は、審判は手旗を使用する。
- ⑪ 参加校は、本大会を共催する公益財団法人日本ライオンズの大会の基本コンセプトを遵する。

公益財団法人日本ライオンズの大会の基本コンセプト『自立とRESPECT』

○ 自立への願い

公益財団法人日本ライオンズは、特別支援学校の多くの生徒が、卒業後、実社会に出て就労することを踏まえて、生徒が自ら判断し、自立的行動が可能になるように、生徒の主体的判断を尊重する大会を目指しています。

このため本大会は、通常のフットサル競技会では許されている監督・コーチのベンチでの指示・命令を禁止しています。監督・コーチは、選手交代時以外はベンチに座り、状況を見守り、生徒の自立的行動を正確に把握して、穏やかな態度で、生徒が主体的な判断・決定・実行する力を高めるよう、温かな思いやりのある行動を期待しています。

○ RESPECTへの願い

生徒は、卒業後、実社会に出た場合、RESPECT「他人への思いやり」があれば、大抵のことは円滑に進めることができます。この大会を通して、自校や他校の生徒同士、学校の先生、大会関係者、特にゲームでは審判へのRESPECT行動を具体的に示す大会を目指します。

このため会場では、自校の生徒同士、引率の先生、対戦相手校の生徒と先生、審判、大会関係者などにはRESPECTを表す「こんにちは」や「お願いします」「ありがとうございます」などの具体的な礼儀や言葉遣いを行うことを期待しています。

公益財団法人明日佳 事務局長 鈴木 重男

I 全国12地区122校の代表12校が参集

当法人が主催開催している小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会は、全国特別支援学校フットサル大会の北海道大会としての全国大会予選に位置付けられている。

この全国大会には、第1回大会は北海道中札内高等養護学校、昨年の第2回大会は札幌市立札幌みなみの杜高等支援学校、今年の第3回大会は北海道札幌あいの里高等支援学校が出場した。

今年開催された公益財団法人日本ライオンズ（小野寺眞悟理事長：当法人理事長でもある）主催の第3回全国特別支援学校フットサル大会はスポーツ庁、愛知県、名古屋市、全国特別支援学校長会、中日新聞社の後援をいただき、2024年11月2日、名古屋市中村スポーツセンターで開催された。7月～9月に行われた全国12地区122校の予選を勝ち抜いた12校の精鋭が名古屋に参集した。



<写真1 参加校の集合写真>



<写真2 大会役員の集合写真>

II 開会式

大会前日の11月1日、名古屋市の老舗である名鉄グ

ランドホテルで組み合わせ抽選会と開会式が行われた。大会会長の小野寺理事長は、「選手の皆さんは日ごろ鍛えた技とチームワークを存分に発揮して頑張ってください」と挨拶。続いて名古屋聾学校の中西キャプテンが「この大会を開催していただいた多くの人々に感謝しながら、選手一同、正々堂々と戦います」と手話で選手宣誓を行った。この宣誓に対して、参加者も手話での拍手で応えていた。

III 大会理念を合言葉に

11月2日、名古屋市中村スポーツセンターで競技が開始された。競技は3ブロック4チームずつで予選リーグを行い、その後、順位決定戦で優勝を競った。激戦を勝ち抜き優勝したのは、昨年に引き続いて栃木県立特別支援学校宇都宮高等学園で、準優勝は北海道札幌あいの里高等支援学校、第3位は奈良県立ろう学校であった。

予選リーグと優勝校を決める順位決定戦では、この大会の理念である「教師のコーチングに基づかない、生徒同士の自主的な判断によるフットサル」を合言葉に、参加各校が自校の名誉と生徒一人一人のプライドを体全体で表現していた。生徒を激励するため、開催地の名古屋市だけではなく南の大分、北の北海道など、参加12校の保護者が会場に訪れ、大きな声援を送っていた。

IV 北海道札幌あいの里高等支援学校の活躍

北海道代表の北海道札幌あいの里高等支援学校は決勝では負けたが、実力は1番との高い評価を得た。

このことは本道各校のフットサルのレベルの高さを証明したと言えるものであり、今後、本道勢の全国優勝が期待されるところである。

特別支援学校の生徒の大半は、卒業後、就職する。この大会は学校生活に強い影響を与え、フットサルを通じた体作りだけではなく、礼儀、マナーをはじめ、地域社会での円滑な生活に資するであろう自主的・自発的な行動の力を学ぶことが期待できる。こうした生徒の成長や成果は、フットサルに参加する特別支援学校の関係者のからの異口同音の高い評価でもある。



＜写真3 選手同士の激しいプレー＞
札幌あいの里高等支援学校 vs 宇都宮高等学園



＜写真4 表彰式＞
小野寺眞悟理事長（左）と優勝校の宇都宮高等学園

V 第4回全国大会に向けて

来年度の全国大会は2025年11月1日、東京都で開催される。

地区予選では本年度の実績を上回る参加校数となり、試合では個々のプレーはもとより、より優れたチームプレーなど、日頃の切磋琢磨の成果を存分に発揮されんことを願っている。

公益財団法人明日佳 事務局次長 松下 高広

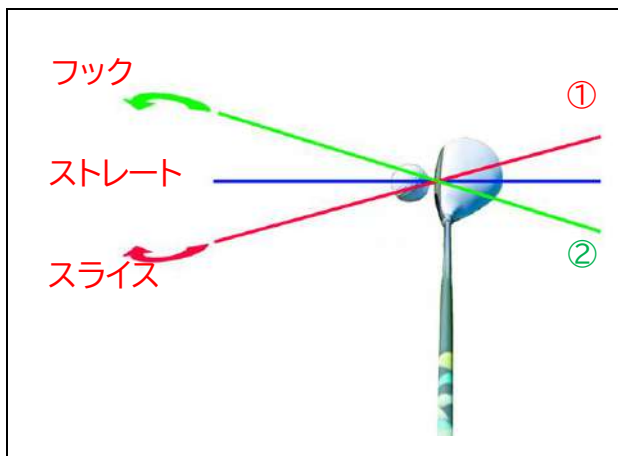
I はじめに

地面に止まっているボールを打ち、真っ直ぐ飛ばすことは意外に難しい。これはゴルフの話であるが、本人は真っ直ぐ打ったつもりでもボールはスライス（右方向へ曲がる）したり、フックしたりと安定しない。それ故にここ2～3年、1打を減らすために理論を学び直したり、フォームの修正を試みて来た。



＜図1 打点の違い＞

図1左のようにボールをクラブの中心で打つのが良いのだが、先端部A点で打つとフックとなり、右のように根元で打つとスライスになる。この微妙な違いに加え、スイング軌道も問題となる（図2）。



＜図2 スイングの軌道＞

青線のように真っ直ぐスイングするのが基本であるが、頭の位置、体の向き、腰の回転、体重移動、左膝のブロック、左右の腕の開きと絞り、左肩の開き具合等々により、クラブスイングの軌道が①や②になるとボールは真っ直ぐ飛ばなくなる。

長年の習慣でスイング自体は頭で考えることなくほぼ自動的に再現できるのだが、一つ一つの動作要素に

チェックを入れてフォームの再構成を試みると、これが非常に難しいことに気付く。複数の身体部位の運動感覚を同時に感受し、同時に修正を加えることは非常に難しい。身体内部に対する人間の意識の対象は原則的に1つのことにしか向かないからである。

障害による身体運動の様相は異なるものの、知的障害の子や肢体不自由の子が運動を習得する際の困難さは、上記のような身体への意識化の問題と身体操作の実現過程に課題があると考えて良い。

このことを動機として、「身体図式」「運動動作」「複数動作の統合と自動化」、そして「その実現の契機」について考察してみることにした。

II 身体図式について

身体図式という言葉聞いて思い起こすのは、身体各部についての位置や名称、構造、動作イメージ、あるいは身体操作やその運動感覚等であるかも知れない。

しかし、身体図式とは平面上の二次元図でもなければ、イメージや位置関係のことだけではない。また単に身体がどう動くかとか、身体の及ぶ範囲がどこまでかということだけでもない。幼児がうまく動作模倣できない様子を「身体図式が確立していないからだ」「対面する他者の身体図式を自己の中に取り込めていないからだ」とする論もあるが、こういう意味だけの身体図式でもない。

現象学を特別支援教育に還元しようとする河野²⁾は身体図式についてこう述べる。

- 身体図式は、ただの運動の図式ではない。運動する身体は同時に知覚する身体である。
- 身体図式は、さまざまな内受容的及び外受容的諸感覚、および運動制御が一つの協働するシステムとして結び付いているさまを表す。

河野の指摘を理解するためには、前提として人の運動や動作には全て「意味」があり、身体や身体運動は意味をもって「世界」とつながっているということを知解する必要がある。人は生を受けて今に至るまで身体を基軸として世界、つまり人（私、他者）・もの・事象

に向かい、それらとの相互交渉を通して意味を獲得し、時期に応じて、また必要に応じてその意味を更新してきた。河野が言う身体図式とはその結果得られた「身体と世界との関係性」のことなのである。つまり、相互交渉する対象なしに（世界との相互交渉なしに）人は己れの身体図式を確立できないのである。

換言すれば、意味を持てるということは、「私」（自己、自我としての「私」。以下同じ）は対象との関係性を「分かっている」ということであり、「私」は考えなくてもその運動は「できる」ということなのである。ある運動を自動的に再現できるようになる過程において「分かった」行動、「できる」行動は徐々に意識下に「沈殿」していく。そして、行動を再現する時は運動や動作について一つ一つ意識せずとも自動的に再現できるということなのである。歩くこと、ボールを蹴ること、カップでお茶を飲むこと等々、できるようになった運動を私達は「身体のここをこう動かそう」等とは考えず、いつでも運動を再現できるのである。

河野¹⁾はこう結論する。

- 身体図式の発達とは、環境の持つさまざまなアフォーダンスと自分の運動を連動させることである。

II アフォーダンス

身体運動における「意味」について、脳性まひ当事者である熊谷²⁾は身体運動と環境との「応答関係」を重要とし、これを「身体外協応構造」と呼んだ。「身体外協応構造が成立していなければ運動は意味を失い、運動がこの構造に組み込まれ意味を持つためには、「運動を繰り出す側とそれを拾う側との間に、あらかじめある程度『こう出れば、こう返ってくる』という了解事項を共有する必要がある。それは応答するのがモノであっても人であっても、である」と述べている。

熊谷が言う「応答関係」と河野の「意味」は同義であるのだが、この考えはギブソンやノーマンが提唱した「アフォーダンス」(afford 支える、与える)と通底する。私達は目の前にあるモノの用途が分かっている時、それに働きかければどのような効果(結果)が生じるかを(予測を含めて)すでに分かっている。そうでなければ動機そのものが生起せず、意図をもった身体運動(行動)は起こらない。例えば目の前の新奇なデザインの用具が身体や意識から疎外されたデザインであると、その機能や用途、有用さ等は「私」にとって意味をなさず、モノを目の前にしてただただ「私」は佇むこと

しかできなくなる。このように私達は対象が「モノであっても人であっても(また運動であっても)」意味や関係で結ばれているとするのがアフォーダンスである。

河野¹⁾はこれらを踏まえ、「意味」について以下のように説明している。「意味」とは、

- ある事柄を他の事柄と結び付けること。
- ある内容を何かの文脈の中に位置付け、関連づけを与えること。
- 地を背景として浮かび上がる図。
- 行為を動機づけること。

III アフォーダンスの更新

上記の河野¹⁾の整理は、「私」と世界を意味づける身体的な規範が実は「知覚」なのであり、知覚することとは環境(世界)、つまり対象との「意味を知覚すること」と述べていることに他ならない。

さて、これらのことをゴルフに当てはめるとどのようなことが言えるのだろうか。

①意味(対象物/理論的背景)

- 私はボールとクラブの特質や使い方を知っている。
- 私はスイングの基本理論と方法を分かっている。

②実践(身体運動)

- 私は実際にクラブを使ってボールを打つことができる。

③運動の自動化

- 打つ時のフォームやスイング運動は意識しなくても実践することができる(分かっている運動)。
- このように打てば結果はおおよそこうなるという見通しを持っている(経験、予測)。

④意味の更新(動機)

- より真っ直ぐに打つためにフォームを改善したい。

⑤意味の更新(実践/身体運動)

- いくつかの課題を発見し、それを改善しようとするが、1つの部位の身体運動を意識すると、他の運動の遂行が疎かになる(同時に2つの身体運動をすぐには処理できない)。
- 運動感覚と結果がマッチしない時、何が原因なのかが分からない時があり、どこを修正すれば良いのか迷うことが多い。

①②はアフォーダンスのことであり、④はその更新を意図したものとと言える。③はすでに自動化した運動について述べたものであり、「分かっている・できる」

運動の再現のことを意味している。

問題は⑤であるが、表1のような課題を、スイング開始からフォロースルーまで、わずか1秒以内の間に同時に処理するのが非常に難しいのである。

＜表1＞ 私の課題

- フィニッシュまで頭の位置を動かさない。
- スイングトップで腰を十分に捻る。
- 右脇を締めてダウンスイングに入る。
- スイング軌道が図2の①②にならないようにする。
- インパクト時は両肩を打球線と平行にする。
- その時、体重移動は左脚に8割程度とする。

よくよく考えてみるとどの運動も単独で成立していることはなく、1つの運動はその前後の運動と結び付いていることが分かる。また、運動とは協調的な身体動作が一連の間断ない流れの中にあるものだと再認識することになる。さらに、實際上、どれか1つ2つの課題（新規な動作、身体内部の運動感覚）を意識する（客観化する）のが精一杯で、一度に2つの内部感覚を同時処理することはほぼほぼ困難だということにも気付く（ある1つの動作や姿勢を保持しながら別の動作をすることは可能だが…）。

障害のある子達が新しくスポーツを学ぶ（新規な運動を学ぶ）時、あるいは既得の運動様式をよりバージョンアップする時の難しさがそこにあるように思う。どのようなステップで指導を展開するのが良いのか。

課題の同時的な複数処理が難しいとなれば、まず目的運動（動作）のみを反復練習し、その運動感覚や知覚を深め、目的運動が自動化するまで実践することは1つの方法であろう。1つの目的運動の自動化を達成した後次に次のステップに進むという方法である。

その際の指導においては、目標を認識させることなく子ども達にひたすら1つの運動を反復練習させるのではなく、主体的に課題に取り組めるように指導内容や方法を工夫することは重要である。

一方、練習場面と試合場面では、状況や抱く心理的背景は大きく違うものである。失敗できないという思いが強くなれば自然に緊張度は高まるし、ほとんどのスポーツが対人競技であることを踏まえれば、「相手がいる」という要素を加味した練習もまた必要であろう。つまり、練習においても「意味」を捉えた指導とそれに基づいた実践が重要となる。そこでの意味には「文脈」とか「場の流れ」、「動機」や「予測」というものも含ま

れる。

IV 身体運動の自動化とは

身体運動を意識化（客観化）せずに自動的に再現できることとは、その運動を「分かった」状態にまで落とし込み（沈殿させ）、それを自動再現（維持）できるとであると前述した。

この「沈殿」とはどうやって起こり、どういう内容を含むのだろうか。特定部位の連続運動にしても、全身を使う運動にしても、当初は意識的で慎重だった運動がまとまるのにはどのような契機があるのだろうか。

現象学的観点から田中³⁾はこう述べる。

- （運動学習には）内部モデル成立にとっての要と考えられる「コツ（knack）」をつかむ段階がある。コツの獲得は、運動学習にとって重大な転回点である。というのも、コツをつかむことを経てはじめて、ある運動や動作の方法を「身体が知っている」状態が出現するからである。コツをつかむことで、注意を向けて意図的に身体を動かそうとしなくても、まさに身体が主体としてその運動を遂行できる状態へと変化し、「身体知」として成立したと呼びうる状態になる。
- コツの習得において生じているのは、身体イメージに合わせて意識的に身体を動かしている状態から、身体図式の水準で全身が自発的に動く状態への、運動の質の転換である。

田中³⁾によれば「コツをつかむ」ことが運動の自動化への契機になると言う。Goo辞書には、コツとは「物事をうまく処理する要領。呼吸。勘どころ」「芸道などの急所。奥義。また、それを習得する能力」とある。

例えばボールのドリブル運動にしても、私達はすぐにその運動をマスターできたわけではない。力加減やスピード、方向性、リズム等の感覚要素を捉え、加えて運動を支える全身の姿勢や構えを継続していなければならぬ。運動とはこれらを全て調整・統合していく過程なのである。

その過程について田中³⁾はこう説明する。

- 学習中の身体運動がまだできない状態では、身体各部位の動きが全体として協調・協働しておらず、いわば「ばらばら」である。しかし、練習を続けるうちに、完成された運動のイメージに沿って身体を動かそうとする意図と、実際の身体の動きとがたまたま

一致する瞬間が訪れる。M=ポンティはこの瞬間を「運動的意味の運動的把握」と表現している。動きのただなかで、全身を一貫して流れる時空間的な配置を経験することと言い換えてもよいだろう。

ばらばらで協調していない運動とは、身体各部の運動やフィードバックされる感覚情報を1つ1つ意識化（対象化、客観化）している段階にとどまっている運動だと言えるだろう。それは迷って試行錯誤している状況だとも言える。そうした試行錯誤がはずれる瞬間に向かうためには、動機、「意図」の継続や動作の評価（自己評価や他者評価）は重要になるだろう。

さて、田中³⁾の記述にあるような「意図と動きがたまたま一致する」とはどういうことか。

- 手の動き、上体の構え、軸足の使い方など、身体各部位の動きを意識的にコントロールするだけではコツはつかめない。そうした努力は必要条件ではあっても十分条件ではない。
- 運動学習の本質には、偶然性の契機が消しがたくともなう。動作の意図と実際の動作がたまたま一致するからこそ「できた！」という明証性のある感覚がともなうのであり、喜びや感動が生じてくるのである。
- 意図的なコントロールのみで獲得できる動作は、既存の身体図式に備わる運動レパートリーで対処できるものであり、学習に伴うべき新規性を欠いている。
- 「コツをつかむ」ことは既存の身体図式に新しい運動を付け加えることであり、M=ポンティによれば「身体図式の組み換えであり更新」である。

運動学習においてコツをつかむ契機は「偶然性」に拠るところが大きいと田中は言う。コツをつかむとは新たな意味の獲得（アフォーダンスの更新）を意味するのだが、新たな意味とは「私」にとってどのように位置づけられるのか。

- このような身体図式の更新を経て、新しいやり方で環境と相互作用することが可能になる。箸で食べ物をつかむ動作を学習すると、箸は単に「にぎれる」棒として知覚されるだけでなく、「それを使って物をはさめる」道具として知覚されるようになる。つまり、以前には不可能だった仕方で環境の知覚が学習された行為をアフォードするのである。

偶然に「できた」「分かった」は、1つの意味の獲得を越えて次の新たな意味、つまり「できる」「分かる」の広がりにつながっていると田中は述べる。

コツの獲得が偶然性に左右されるということにある種の反発がないわけでもない。しかし、その獲得は人それぞれである以上、「いつ」とは特定できないことにも思い至る。三重障害のヘレン・ケラーが「water」の指文字の意味を理解し、ものには名前があるということに気付いたのはまさに偶然だとも言えそうである。

しかし、その気付きの瞬間に至るまでサリバン先生が労を惜しまず指導を継続して来たからこそその結果であろうとも思う。

V おわりに

運動、その自動化、身体図式、意味、アフォーダンス、その更新、コツについて考察して来た。これらは全て同一線上に並んでいるものと理解して良いだろう。

同じ運動でも人によって習得の早さや獲得レベルが異なるのは、コツの習得の在りようが個々で異なるからと考えて良いように思われる。課題に対する気づきや方針変更の仕方が早いか遅いか、あるいは既存のアフォーダンスを駆使して運動をまとめ上げる（更新すること）がうまいかそうでないのか、そんなところにも要因はあるのではないかと思う。

ここでの考察が障害のある子ども達の運動学習に対する1つの振り返りになれば幸いである。人である教師が指導することの「意味」を考えていきたい。

（捕捉）

私のゴルフスイングの更新は一朝一夕には成らず、いまだに試行錯誤を繰り返している。練習の成果を試すためにコースに出ても一喜一憂、一進一退である。

【参考・引用文献】

- 1) 河野哲也：現象学的身体論と特別支援教育、北大路書房、2015
- 2) 熊谷晋一郎：リハビリの夜、医学書院、2009
- 3) 田中彰吾：運動学習におけるコツと身体図式の機能、バイオメカニズム学会誌 Vol.37 No.4、2013

病弱児童生徒のベースボール型球技の実践について

～体験的な活動から主体性の向上を目指して～

北海道手稲養護学校三角山分校 教諭 梅野 綾人

I 北海道手稲養護学校

北海道手稲養護学校三角山分校（以下：本分校）は、「独立行政法人国立病院機構 北海道医療センター西館」に入院する神経筋疾患や重症心身障害などの児童生徒を対象にした学校である。令和2年8月、併設する国立病院機構北海道八雲病院と共に、北海道八雲養護学校が札幌に移転し、「北海道手稲養護学校三角山分校」としてスタートした。札幌でも校舎は北海道医療センターに隣接しており、特別教室などの学校施設・設備を市立札幌山の手支援学校と共有している。

現在は小学部1名、中学部2名、高等部8名の児童生徒が在籍しており、その多くが筋ジストロフィーである。筋ジストロフィーは進行性の疾患のため、病気の進行に伴って転学及び進学をしていく場合が多い。この疾患は、今までできていたことができなくなってしまう喪失体験と社会経験の不足により自己肯定感が育ちにくいと言われている。また、家族と離れての入院生活に抵抗や不安を感じる生徒も多いため、生徒一人一人の心に寄り添った指導や主体的に「できること」を増やし自己肯定感を高める指導が大切となっている。



<写真1：北海道手稲養護学校三角山分校の校舎>

本分校の教育課程は、児童生徒の障がいの程度や実態に応じて3つの類型を設定している。

<表1：本分校の教育課程>

普通学級	重複障害学級	
A類型	B類型	C類型
準ずる教育を主とした教育課程	知的障害教育を主とした教育課程	自立活動を主とした教育課程

昨年度から感染症等の対策が緩和し、隣接している病院の主治医と内容や方法を確認した上で、校外へ出での学習が可能となってきている。また、ICTの活用は本分校の指導の充実や生徒が主体的に学ぶためのより有効な手立てとなっている。テレプレゼンスロボットを使用した体験的な学習や間接的な学習などは、学びの場や方法を充実させるための非常に大切な取り組みとなっている。

II 生徒の実態と体育の状況

本分校の生徒は運動機能の低下により、前籍校では体育の授業に主体的に参加した経験に乏しく、スポーツへの喪失感を抱いてきた生徒も多い。しかし、本分校に転学及び進学し、自分に合った教材・教具を使うことで、スポーツを主体的に「できる」「楽しむ」ことが可能になり、体育の授業を楽しむことができるようになった。

本分校の体育の授業は、高等部のA類型、B類型、中学部のB類型の生徒が合同で学習を進めている。実態に応じてルールの変更や学習方法を模索しながら進めているが、在籍数の減少に伴い団体競技の実施が難しくなったり、チームや対戦相手が限られた中で戦術の幅が狭くなったりする様子も見られる。

III 研究の目的

コロナ禍以降、校外学習や交流学习などの実施が難しく、本分校の児童生徒の対外的な学習の機会が減少していた。今年度、北海道日本ハムファイターズ主催試合の招待を受けるというチャンスに恵まれた。“世界がまだ見ぬボールパーク”で北海道に本拠地を置くプロ野球選手の観戦、球場の雰囲気、スポーツ施設を体験する機会をもとに、本研究では実際に見たこと・感じたことを自分たちなりに楽しめるベースボール型競技に反映することで主体性が向上していくのではと考えた。

本分校生徒は進行性の病気のため将来的にプレーヤーとしてスポーツに取り組むことが難しくなる。本研

究を通して「見る」「支える」「知る」ことも生涯スポーツを楽しむ一つであることを知り、将来的に余暇の一部となってくれたらと願いを込めている。

また、道内の特別支援学校には外部で活動している野球チームもあるため、今後、本分校の生徒もベースボール型の競技を通じて校外の人たちと交流をもてる種目であると考えている。

IV 研究の内容・方法

1 対象

高等部 A類型 3名 B類型 5名
 中学部 A類型 1名 B類型 1名

2 実施期間

令和6年4月～5月（A類型：体育理論） 5時間
 （B類型） 1時間
 令和6年5月（観戦） 4時間
 令和6年8月～10月（実践） 14時間

3 内容

＜表2：単元「野球」＞

単元名	時数
○野球について A 類型：体育理論 野球の歴史、ルール B 類型：エスコンフィールド北海道 の施設について	5 1
○野球観戦 ・観戦のマナー ・プロ野球選手について	4
○基礎練習 ・事前学習（誰でも野球盤） ・三角山ルール ・攻守練習	4
○ゲーム ・チーム対抗試合	10

4 方法

本分校で行っている様々な競技は、生徒の実態に応じてルールを変更したり、生徒に応じた教材を作成したりして学習を進めている。本研究では本分校生徒は校外へ出て学習する機会が少ないため、実際の野球の

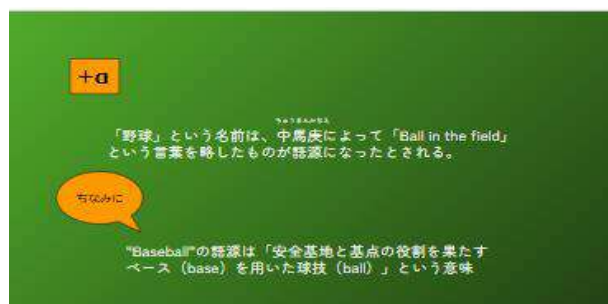
試合を観戦することで球場特有の雰囲気や観戦のマナーなど「見る」「知る」機会を設けた。

また、本分校の生徒は病気の進行に伴い車椅子の座り方の微調整や、学習用具の準備など日常的なことも他者の介助を必要とするため、相手に具体的に伝えるコミュニケーション力が重要になる。ベースボール型の授業においても、打席でボールを置く位置や、守備位置、打順、ボールが来たときに誰が取りに行くのかなど作戦会議を通して些細なことでも仲間と会話をすることを重点的に指導を行った。

V 指導の実際

1 事前学習について（「知る」について）

A類型では「体育理論」の中で、スポーツへの多様な関わり方として「する」ことだけではなく「見る」「支える」「知る」こともスポーツを楽しむ要素の一つであることから学習を始めた。学習で「知る」ことができた内容は、他の類型の生徒に伝える機会を設定することで、見やすい資料や話し方を考える様子も見られた。また、生徒同士で教え合うからこそ、聞いている生徒も質問や感想などをプレゼンテーションしてくれた生徒に伝えようとする積極的な姿勢を見せてくれた。



＜資料1：野球の語源について＞



＜写真2：野球の歴史についての説明している様子＞



＜資料2：プロ野球について＞



＜資料3：野球のルールについて＞

2 事前学習(北海道日本ハムファイターズ主催試合の観戦「見る」「支える」について)

令和6年5月15日(水)にエスコンフィールド北海道にて、日本ハム対西武ライオンズの試合を観戦した。客席とフィールドの距離が近い特徴のある球場で、昨年度の振興会の御支援で作成させていただいたユニフォームを着用し、球場と一体になってチームを応援するという経験をする事ができた。初めて野球選手を間近に見ることができ、ホームランで球場全体が盛り上がる様子を圧倒された生徒が多かった。これまで野球に興味のなかった生徒が帰校する頃には結果が気になりラジオで試合中継を聞くなど、野球に対する興味関心が高まる機会となった。



＜写真3：エスコンフィールド北海道での野球観戦＞

3 基礎練習(「する」について)

体育館での基礎練習に先立ち、島根大学理工学部の伊藤史人研究室が開発したwebアプリ『誰でも野球盤3D』を活用してイメージトレーニングを行った。この

アプリではパソコンやiPadからでも取り組めるため、本校生徒もマウスや画面をタッチして簡単にボールを打つイメージを掴むことができた。また難易度の異なる2つのモードがあり、「ノーマルモード」ではピッチャーが投げたボールにタイミング合わせて打つため、来たボールを打つというイメージをもちやすかった。「ユニバーサルモード」では、ホームベース上で回転するボールに合わせて打つため、ホームランを狙うならこの位置でボールを打つなど、打つ方向を意識させやすかった。また、一人一人がこのアプリを通じて、自分たちが楽しめるフィールド作りや得点の取り方について考える参考とすることができた(アプリは現行改良版となっており実際に使用した動きとは異なっている)。



＜資料4：誰でも野球盤アプリ＞



＜資料5：上：バリアフリー版
下：ノーマル版＞



〈写真4：誰でも野球盤に取り組んでいる様子〉

『誰でも野球盤』を体験した後に、自分たちが競技として取り組むにあたって「必要な用具」「アウトの取り方」「走者について」などを生徒たちで話し合った。「用具」については今までに経験した競技を参考に、車椅子ホッケー用のスティックで行えるのではないかと意見が出てきた。アウトの取り方については、「スティックにボールが当たったらアウト」など、生徒同士の中で決めることができていた。「走者」については、1チームの人数が少ないため、塁に残ってしまうと打順が回ってくる可能性があることや、スティックにボールが当たってアウトとすると電動アシスト車椅子の生徒が不利になるのではないかと意見も出て、走者は残らず盤上で表示をすることを決めていた。



〈写真5：守備練習の様子〉

体育館では、攻守の練習を行った。打撃練習では一人何球打つのかを最初に生徒たちと確認をし、試合と身体への疲労に影響しない球数を考えて行った。打順が回ってくるまでは守備位置をローテーションし、自分がどの守備位置だと守りやすいのかを確認した。また、最初はボールがスティックに当たったらアウトにしよう話し合っていたが、実際に動いてみると長さのある棒の先の小さい面にボールを当てるのが難しく、途中で生徒達が「車椅子に当てるのもいいことにしないか」と話し合い、途中でルールを変更することもあった。

守備のみの練習では実際に教師が打ったボールを取る練習も行った。速い打球にとまどう生徒もいたが、

練習を繰り返すことで積極的にボールに向かって取りに行く姿が見られるようになった。また、仲間がエラーしたときのカバーリングの練習も行うことで、チームの誰かがエラーをしても「カバーしてもらえる」、「カバーする」といった仲間意識をもつ練習にもなった。

4 教材教具について

本分校で行っている様々な競技は、生徒の実態に応じてルールを変更したり、生徒に応じた教材を作成したりして学習を進めている。



〈写真6：スティックを固定する生徒の場合〉

写真6の生徒はスティックを持つのが難しいため、車椅子にスティックをマジックテープで固定した。車椅子を振り子のように動かしてボールを打つ動作に取り組んでいる。また、ボールをキャッチしやすく、押し出しやすいように先端がフォーク型となっている。



〈写真7：電動アシスト車椅子の生徒の場合〉

写真7の生徒は電動アシスト車椅子のため片手で車椅子を動かし、もう片方の手でスティックを扱っている。スティックは生徒の体に合わせて長さを調節している。また、持ち手の部分が持ちやすいようにグリップが太い生徒、細い生徒もいる。



〈写真8：足元が見えない生徒の場合〉

写真8の生徒は、常時人工呼吸器を使用している。身体への負担を減らし、良い姿勢で活動ができるようにするため、車椅子をリクライニングした状態で学習や活動を行う必要がある。そのため、視界が常に上向きとなりスティックやベース上のボールや得点コーン、ボールの行方を見るのが難しい。足元が見えるようにミラーを設置することでボールの位置などを把握できるように見えにくさを改善している。



<写真9：ボールの種類>

生徒によってはボールがスティックに当たる衝撃が重い、軽い個人差があるため自分の身体と相談しながら選択できるように数種類のボールを用意した。また、打席ごとにボールを選択できる機会を設けることで、狙いたい場所に依じて試行錯誤しながらボールを選ぶ様子が見られた。



<写真10：ホームベース、バッターボックス>

ホームベースについては最初、真っ白の通常のベースを作成し使用していたが、練習を重ねていく中で、転がってきたボールを打つのでは飛距離が出なかったり、スティックから手首への衝撃が大きかったりしたことがわかった。そのため、ベース上に①～⑦の番号を付けて生徒が選択した番号上にボールを置き、打つ方法に変更した。

ホームベース、塁、バッターボックスは、一般の大きさで作成し、実際の大きさを体験しながらゲームに取り組んだ。



<写真11：得点板>

大きい得点板については誰でも野球盤のように弧を描くように外野に配置し、小さい得点板については内野に配置することで攻撃のしやすさを工夫した。

5 ゲーム(「する」「見る」「支える」)



<写真12：試合前の作戦会議の様子>

試合前の作戦会議では打順や守備位置を話し合う場面を設定した。車椅子やスティックの特性を考慮して守りやすい位置を相談する様子が見られた。

試合を重ねていく中で、1チームの人数の少なさに起因する課題も出てきた。具体的には打球の飛距離を出すためのスイングやイニングごとの守備ポジションの変更に伴う体力面への影響である。その都度、生徒たちが話し合っていてイニング数を4イニングにしたり、その日の人数に合わせてポジションを変更したりと臨

機応変に対応する姿も見られた。



<写真13：ゲームの様子>

試合中、仲間が打つ時には「頑張れ～」と応援する声掛けが見られたり、攻撃では打ったボールの行方を見て「おいしい!」「やったー!」と歓声を上げたり、守備では「〇〇君お願い!」と仲間の動きを観察した上で声を出したり、ゲーム中にもコミュニケーションを取りながら活動に取り組む様子が増えた。

VI 成果と課題

今年度は実際に野球観戦を体験したことで、「する」だけではなく「見る」「知る」「支える」も含めて、自分たちが競技を楽しく「する」ためにはどのような工夫が必要なのかを考えることで主体性の向上につながることを目的に研究を進めた。

本校の生徒は、「自分なんか……」「どうせやってもできない」と、スポーツに対して消極的な姿勢が見られていたが、生涯スポーツの楽しみ方として、観戦する楽しさや、仲間を応援する、される喜び、ルールや用具の工夫をすれば自分たちも「できる」と感じることに繋がられた。また、生徒たちが自ら考え、話し合い準備を進めていくことで、ゲームでは「勝つためには後ろの打順の人に繋げるバッティングをする」や「ホームランを打つためには〇番でやるとうまくいくことがわかった」など、仲間を意識した言動も見られた。振り返りでは「この学習で学んだことを次の競技へ活かしたい」と、次の競技に向けて意欲的に向かう姿も見られた。

課題としては、少人数のため団体競技ならではの仲間と一緒にプレーをするという楽しみが体験し難しくなっている。また、病気の特性上、体力面でも体験できる競技に限られる場面が多いため、今後も校内だけで

はなく生徒自身が視野を広げて活動できるような取り組みを増やしていきたいと考える。

公益財団法人小野寺パラスポーツ振興会のご支援により、今年度は野球観戦に必要な経費や生徒に合った用具作成の材料に使用させていただくことができた。大変教育活動が充実し感謝申し上げます。今後も振興会のご支援のもと、児童生徒の実態に合わせて、児童生徒が競技を楽しんで行える様々な取り組みの考案・発信に務めていきたい。

I 今回の研究に当たって

1 学校の実態

流水が寒さを伝え、朝日が新しい一日を告げるオホーツク海を眺望し、流水をかき分け泳ぐ「流水観光船ガリンコ号」、バイオマス発電所、2020東京オリンピック・パラリンピックの陸上競技場の材木を担った木材所、そして日本中が羨む海産物が集まる水産加工場がある紋別市。人口約2万人にもかかわらず、ふるさと納税の納税額では全国の上位人気を誇る、豊富な地域資源に恵まれた都市です。

本校は開校から28年目を迎えたオホーツク管内で唯一の公立特別支援学校（単置高等部）です。本校には職業学科と普通科が設置されており、今年度の総生徒数は70名のうち61名の生徒が部活動に入部し、余暇活動の充実を目指しています。運動系の部活動は7つあり、各部活とも各種の大会に出場しています。また、文化系の部活動は3つあり、紋別市の施設に作品を展示するなど、非常に部活動が盛んな特別支援学校の一つです。どの部活動においても、熱心に取り組む生徒が多く、学校生活や寄宿舎生活を送る上でも部活動指導における重要性は非常に大きいのではないかと感じています。

本校に入学する生徒は知的障害があり、協調性運動障害や自閉症スペクトラム症候群などを併せ有する生徒もいます。現場実習では、市内の企業や事業所など70カ所を超える企業とつながり、本校の教育活動に協力していただいています。教育職員（寄宿舎指導員含む）は89名で、うち39歳以下が約80%、初任段階者職員が65%と、非常に若い年齢層や経験年数の浅い職員で構成されています。

2 部活動についての実態

本校の部活動はバスケットボール部、フットサル部、新体操部、ソフトボール部、卓球部、陸上部、バドミントン部、美術部、パソコン部、文化読書部の10部があります。希望制になっており70名中61名が加入しています。放課後の1時間が活動時間となっていて、社会生活での余暇時間の充実を目的として取り組んでい

ます。

その中で、我々陸上部は今年度、2年生5名、1年生1名の計6名で構成されています。基本的には、週3回（月・火・木）活動しています。

近年コロナウイルス感染症の影響で、大会に出ることができておらず、大きな目標がなく、日々、単調なトレーニングの繰り返しから運動の楽しさや充実感を感じにくく、課題がある状況です。

3 研究の目的

そのような中で、今年度は本振興会の研究助成費等で、大会に出場することや、外部の人材を活用してメリハリを付け、活動を充実させることを目標としました。陸上競技の特性上、人と関わるのが少ない個人競技であることや、日々のトレーニングにおいて個人でのトレーニングが多く、他者と関わるのが少ないため、トレーニング方法の工夫や大会の参加を通じた地域との関わりから、部員たちの学びを豊かにしようとする目的で考えました。

II 研究の内容・方法

1 内容・方法

コロナ禍での活動は、大会に参加する機会も格段に少なくなり、試合経験を積むことや、目標を設定することが難しくなっていました。近年、大会参加においては「おこっぺ牛乳の里マラソン」のみの参加で、大会経験を積み、地域との関わりをもつことができなくなってしまっている現状でした。日々のトレーニングではトレーニング内容がマンネリ化してしまっているため、レクリエーション要素を取り入れてリラックスし、楽しい雰囲気を取り組める場の設定や、他者との関わりを多くすることで一人での活動を少なくするなど、試行錯誤しながら取り組んでいました。

また、地域社会の中で他者との関わりを積極的に持つことは、卒業後に社会で生き抜いていくために必要な要素であると考えています。特別支援学校においては、在学中の3年間は指導経験が豊富な教員や寄宿舎指導員の体制で教育や生活指導を受けることができま

すが、卒業後になると、在学中に関わっていた教員がいなくなり、他者との関わりが少なくなります。その結果、社会生活の空虚さや、人間関係の構築ができなくなる生徒が多いと感じています。この問題を解決するためには、自己の困難や課題に直面したときに自ら克服する力の育成と、一人では解決できない課題に対しては良好な人間関係を構築し、自ら助けを求め、互いに助け合うことの大切さを学ぶことが大切です。地域社会の中で他者との関わりを充実させることが生徒の将来をより豊かにするのではないのでしょうか。

そこで、本研究テーマ【地域社会と他者との関わり】の充実を目指すため、①各種の大会参加、②外部人材による指導、③身近な人との関わり、④日々のトレーニング方法の工夫の内容と取り組みを考えました。以下、取り組み内容として現状、実践、成果、課題を紹介します。

(1) 各種 大会への参加

「おこっぺ牛乳の里マラソン」

「たんのカレーライスマラソン」

ア 現状

陸上部では例年「おこっぺ牛乳の里マラソン」に参加しています。日々のトレーニングの成果を発揮できる場として、とても有意義な大会として考えています。参加距離は生徒の能力に応じて5km、10kmの中から選択して参加しています。現状として「おこっぺ牛乳の里マラソン」は自己の記録への挑戦を主にしており、日々の練習の成果を発揮し、課題を克服して自己の記録を更新する達成感を味わえる一方で、気軽に走ることの楽しさや心地よさなどを感じる事がむずかしいという問題がありました。本校陸上部においても「おこっぺ牛乳の里マラソン」に参加するハードルが高く、参加を見合わせる生徒が毎年数人いる現状でした。

イ 実践

そのような現状から自己の記録達成のための大会である「おこっぺ牛乳の里マラソン」に加えて、気軽に参加できる大会を顧問と部員で探しました。その中で、北見市端野町で開催される「たんのカレーライスマラソン」に興味を持った生徒が多く、参加を検討しました。

「たんのカレーライスマラソン」は4人1チームとなり、それぞれ距離の異なる4つのコースに分かれてカレーの食材を取りに走ります。走った後は、メンバ

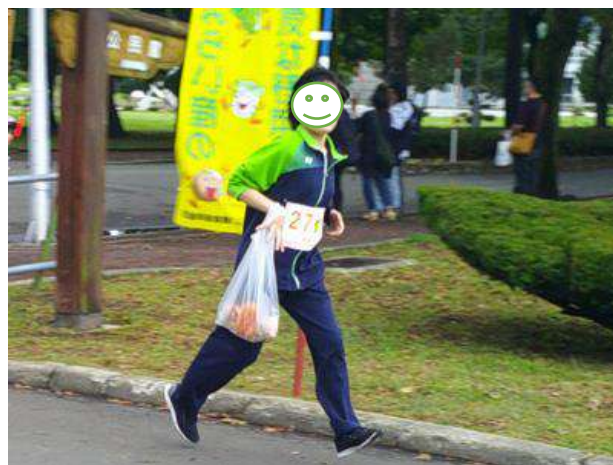
ーが集めた材料を使ってみんなでカレーを作り、楽しく食べるというマラソンです。タイムや順位を競うレースではないので気軽に参加でき、チームで協力できることが「おこっぺ牛乳の里マラソン」とは大きく異なるところでした。

そこで、今年度は自己の記録達成に向けて挑戦する「おこっぺ牛乳の里マラソン」と、仲間と協力して参加し、記録にこだわらず楽しく走ることができる「たんのカレーライスマラソン」の2つの大会にエントリーすることにしました。

ウ 成果と課題

「たんのカレーライスマラソン」

9月15日（日）に開催され、6名の陸上部員全員が参加しました。ゴール後にみんなが持ち寄った材料で料理するため、顧問や保護者も参加し総勢25名程度での参加となりました。生徒と顧問は2チームに分かれ、スタートの合図で食材を集めに走り、保護者は調理の準備を開始しました。次々戻ってくる生徒たちを労いつつ、調理に取りかかる面白さがあり、できあがった



みんなのために食材を集めに走る！



教員も一緒に4人で協力して食材を集める



集めた食材でみんなで調理する

カレーライスをみんなで食べる充実感も味わえた大会でした。保護者においても調理をする役割があり、生徒、保護者、顧問が一体となって参加できる大会となりました。

「おこっぺ牛乳の里マラソン」

10月6日（日）に開催され、自己の記録に挑戦した



おこっぺ牛乳の里マラソンの
緊張した雰囲気味わう



自己の記録に挑戦する生徒

い2名の部員が参加しました。2名とも10kmにエントリーし、自己記録更新のために日々部活動でトレーニングをしました。大会当日は周りのランナーも自己の記録を更新する目標を持っていたり、順位を目標にしていたり「たんのカレーライスマラソン」とは全く異なった雰囲気ですスタートしました。参加生徒は「自己のペースで走り、自己記録をめざすこと」と「周りの雰囲気を感じ、走ることの達成感を感じることを目標に取り組みました。参加した2名とも周りの雰囲気に飲まれず、緊張感を味方に付けて自己記録を大幅に更新した大会となりました。

今回は記録達成のために走る「おこっぺ牛乳の里マラソン」と楽しく協力して走る「たんのカレーライスマラソン」に参加しました。生徒の感想として「おこっぺ牛乳の里マラソン」では『周りの記録に挑戦する気持ちがすごかった』『スタートの緊張感がすごかった』『ゴール後の達成感が心地よかった』と話していました。「たんのカレーライスマラソン」では『順位を気にしないで良いので楽しく走れた』『私が持ってきた材料でみんなが調理するのが楽しかった』『みんなで協力して集めた材料でカレーを作り一体感が増した』と話していました。

今回2つの大会に参加してそれぞれ違った目標のもとで、本校が目指した成果を達成できたように感じます。走ることは苦しくつらい場面もありますが、それを克服した時の達成感が将来の自信や糧になることを学んだ「おこっぺ牛乳の里マラソン」であり、走ることの楽しさや協力することの喜びを味わい、将来の余暇活動を考える一助となった「たんのカレーライスマラソン」でした。

生徒の実態に応じて、参加大会を選択することがより生徒を成長させることになると考えます。一方で、大会参加による教員の時間拘束による負担や、保護者の送迎の負担、生徒の実態に合った参加大会の選出などに課題があると考えます。

(2) 外部人材による指導

「明治大学体育会競走部(※以下明治大と表記)との練習」

ア 現状

陸上部では毎年指導方法やトレーニング内容について苦慮することが続いていました。本校生徒の実態から、記録達成に向けた専門的なトレーニングよりも、

走ることの楽しさや喜びを味わい将来の余暇活動の一つとして取り組んでいました。そのためトレーニングのバリエーションに乏しく、専門的に指導できる教員が不足している現状がありました。また、日々のトレーニングにおいても部活動顧問が固定されており、生徒のモチベーションも低下している現状がありました。このような現状の中、紋別市において「大学合宿における学校への派遣事業」の案内を知り、本校体育教員岩川倭の指導の下、明治大学の派遣、指導を企画しました。

イ 実践

明治大は「東京箱根間往復大学駅伝競走(箱根駅伝)」の出場を目標に、8月25日から9月3日まで紋別市で合宿を行う中で、地域の方々や学校との交流を行っていました。その中で本校生徒や陸上部員の現状を伝え、生徒のモチベーションの向上、トレーニング方法の工夫などを目的に外部人材による指導を依頼しました。



明治大学競争部の指導を真剣に聞く生徒

指導の実施は8月29日(木)に明治大の5名の学生が来校し、2学年の体育の授業で指導していただきました。4グループに分かれ少人数で指導を行う体制を



速く走る方法を指導してもらう

とり、トレーニングの方法から早く長く走るための方法だけでなく、苦しくなったときの気持ちの切り替え方や、嫌なことへの対処の方法などメンタル面も指導していただきました。一流アスリートの言葉に陸上部員たちは普段と違ったトレーニング方法や走り方などを学び、大会に向けて気持ちが高まった様子でした。また教員も新たなトレーニング方法やモチベーション維持の方法を学んだ機会となりました。

ウ 成果と課題

今回、外部指導者として明治大を招き指導していただいたことで部員たちの意識が大きく変わりました。普段テレビで見るような、箱根駅伝に実際に出場する一流アスリートとの交流は、一つ一つの言葉が具体的かつ説得力があり、真剣に聞く姿勢や態度が見えました。実施後の部活動においても『明治大学の人から教えてくれた走り方をすれば速く走れた』『走って苦しいときの気持ちの切り替え方がわかった』『楽しく走る方法を学んだ』などと感想を述べていました。

普段とは違った環境を設定することで、生徒のモチベーションが向上するだけでなく生徒の実態に応じた指導内容も学べる大変良い機会でした。今回は紋別市主催の派遣事業でしたが、外部人材を活用した指導のメリットを強く感じ、今後の活動において視界が大きく開けた活動となりました。



最後は明治大学の指導者と記念撮影

(3) 身近な人との関わり

「卒業生を対象とした交流会」

ア 現状

明治大の指導を実施した後、様々な人との交流のメリットを感じ、さらに交流の幅を広げたいこうと顧問で話題となりました。ちょうどその時期に、卒業生の余暇活動の乏しさが原因で社会生活が充実していない

現状があると進路指導部からの情報提供がありました。この現状を鑑み、部活動を余暇活動の一環としてとらえ、卒業生がともに参加できるトレーニングを企画することで社会生活の充実につながるのではないかと考えました。本校では卒業生による部活動の参加は可能ですが、参加者は特定の卒業生数名しか参加していない現状でした。

イ 実践

陸上部顧問で検討し、卒業生を招聘し一緒にトレーニングをする計画を企画しました。今回の目的は在校生においては「①卒業生との活動を通して、コミュニケーション能力の育成や人間関係の形成力を図る。②普段とは異なる環境の中で、参加者同士で互いに励まし、協力することで資質・能力の育成を図る。③健全な心身の発達を目指す」こと。卒業生は「卒業後の余暇活動の充実を図る」ことを目的として1月～2月で計4回実施する計画を立てました。

冬季 トレーニング会

皆さんこんにちは！冬の運動不足解消の場として紋別高等養護学校陸上部の後輩たちと一緒にトレーニングをしませんか？トレーニング内容は校内を走ったり、みんなで筋力トレーニングをしたり楽しく体を動かそうと思います。

参加したい方は下記の注意事項をよく読み参加申し込みしてください！

待ってます！

申し込み 0158-24-1120

※ 締め切り日参加希望日の前日12:00まで

参加概要

【日時】全4回を予定（いずれの回も15:35～16:20） ※15:30集合
1月28日（火）、2月4日（火）、2月6日（木）、2月18日（火）

【活動場所】紋別高等養護学校 校内（廊下、格技場など）

【活動内容】校内ランニング、ミニハードルやラダーを使ったトレーニング、筋力トレーニング

【申し込み】参加申し込みは電話受付のみとする。（締め切りは参加したい日の前日12時まで。）

【注意事項】

- (1) 参加人数が多い場合は都度締め切ります。一回だけの参加もOK。（各回定員5名程度）
- (2) 参加者の参加中の事故、ケガについては自己責任とし、事前にも同意をとります。
- (3) 在校生への過度な関わりや、不適切な態度や行動がある場合は参加を許可しません。
- (4) 参加者は活動時間を厳守してください。（早く学校に家たり、遅くまで学校に残ったりしない。）
- (5) 持ち物 運動できる服装、タオル、飲み物、着替えなど

卒業生とのトレーニングを計画 （本校HPにて告知）

ウ 成果と課題

上記の企画は1月28日から開催のため本稿執筆時点においては未実施ではありますが、普段ふれあいの少ない先輩たちとの交流をすることによって、コミュ

ニケーションの向上や、日々のトレーニングにおいてもより一層モチベーションの向上も期待されます。さらに卒業生においても、トレーニングが余暇活動の充実につながることで、社会生活の充実にも寄与できることが考えられます。

(4) その他

「日々のトレーニングにおける実践」

ア 現状

本校の部活動は希望入部制で4月～3月まで1年間の所属となっているため、他のスポーツに興味があっても、なかなか体験がむずかしい現状がありました。陸上部員からも『陸上は好きだけどたまに他のスポーツもしてみたい』等の意見があったり、トレーニングがマンネリ化していたりすることもあり、リフレッシュできる環境が必要でした。

イ 実践

1、3学年が現場実習のため部活動に参加できなかった時期に、生徒指導部において「2学年部活動合同練習」が企画されました。「様々な部活の体験を通して、余暇活動の充実を図る」ことを目的とし、1週間の期間で陸上、バスケットボール、フットサル、バドミントンの部活を体験できる取り組みでした。多くの生徒が合同練習に参加し、普段関わりの少ない教員との関わりも新たな学びにつながりました。

ウ 成果と課題

「部活動合同練習」を通して第一に生徒の運動の幅が広がりました。運動は一つの競技に絞ることなく様々な体験をすることが、より社会生活を充実させる要因となることを実感した取り組みでした。陸上部の生徒からも『この部活が楽しかった。』『もっとやって



バドミントン部の活動に参加する陸上部員

みたい。』『陸上部の練習でも取り入れてほしい』などの声も多く聞かれ、スポーツに取り組む楽しさを実感していました。今後も部活動間に縛られることなく生徒がたくさん活動ができるように取り組みたいと考えます。

Ⅲ 研究の考察(成果と課題)

今回の研究においては、地域社会と他者との関わりを通して生徒の学びを豊かにすることを目的に取り組みました。実態に応じた大会参加など学校外に出て学ぶことは普段とは違った表情や姿が見られ、とても有意義なものでした。教員自らが学ぶ環境や方法を工夫して実践することで、生徒自身が自ら学び体験できる活動でより一層成長できる機会になるのだと感じました。今後の指導の中でもマンネリ化することなく、多くの人と関わり経験していくことが大切であると感じました。

一方、課題としては「働き方改革での業務削減」とのジレンマではないでしょうか。「この活動をすれば生徒はもっと成長できるのではないか」と考えても、日々の業務の量や時間調整であきらめてしまうことも多々あります。教員の仕事の精査を行ったうえで、生徒のよりよい成長を目指した指導の工夫や時間の調整、業務の精査が今後の課題になってくるのだと考えます。

Ⅳ おわりに

今回、実践報告の機会をいただき、生徒の指導に当たって様々な企画や計画を考えました。普段何気なく行っている指導においても教員が教えることは簡単ですが、外部指導者を招いたり、学ぶ環境を変える等の「一手間加える」ことで生徒の学びの姿勢や効果は何倍にもなることが感じられました。

実践後に生徒から『運動が好きになった』『この取り組みが面白かった』『もっと頑張りたい』等の声が聞かれ教師冥利に尽きる取り組みであったと感じ、自分自身の財産となりました。

これからまた、生徒たちと学び合うことができるよう尽力すること誓い、本論の結びといたします。

【協力】

陸上部顧問	鬼頭 洋介
	内海 綾香
	國光 陵介
体育科教諭	岩川 倭
生徒指導主事	岩崎 祐介

特別支援学校におけるサッカー部の現状と課題 ～第2回全国特別支援学校フットサル大会への参加を通して～

市立札幌みなみの杜高等支援学校 教諭 明村 子竜
教諭 金子 裕
教諭 藤本 望

I 研究の目的

近年、日本における深刻な少子化の影響を受け、部活動における1運動部当たりの人数が減少し、中学校における部活動設置数についても減少している。そもそも部活動に加入している生徒も少なくなっていることから、合同部活動実施チームが急増しているといった現状（公益財団法人日本中学校体育連盟,2024）もある。このような背景がある中で、各校における部活動については、①将来にわたり生徒がスポーツ・文化芸術活動に継続して親しむ機会を確保すること、②地域との連携を図り、生徒のニーズに応じた多様で豊かな活動を実現していくこと、③地域住民にとってもより良いスポーツ・文化芸術の環境整備といったことを目指していくことが求められ、令和4年12月には「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン」の策定・公表（スポーツ庁,2024）がスポーツ庁より示されている。特別支援学校における部活動については、令和6年1月にスポーツ庁より「障害者スポーツ推進プロジェクト（特別支援学校等における運動部活動の地域連携・地域移行支援事業）」の募集について示されており、特別支援学校を拠点とするクラブチーム、総合型地域スポーツクラブ、社会福祉施設等のスポーツ活動ができる環境を整理し、児童生徒本人の希望に合わせて活動を継続できる地域連携・地域移行モデルを構築することを目的とした調査研究が実施されるなどの動きが出てきている。

本研究のテーマ設定の理由としては、特別支援学校における部活動については未だに先行研究が少ない現状があり、このテーマでの研究についての必要性の高さを感じたからである。また、今後の動向について、期待、注目されていく分野でもありと考え、本研究のテーマとして設定した。具体的な内容としては、本校が昨年度参加した「公益財団法人日本ライオンズ主催第2回全国特別支援学校フットサル大会」へ参加された特別支援学校を対象とした調査研究を行う。本研究の目的としては、各校の現状と課題について整理し、

本校が今後の方向性について、考えていくための参考資料の1つとなることを目指していきたい。手だてとしては、Google Form を活用した「アンケート調査」を実施し、その集計結果を踏まえ、考察していく。



<写真 大会パンフレット参照>

II 本校の部活動について

はじめに本校の部活動について簡単に紹介をさせていただきたい。スポーツ系5つ（サッカー、バスケットボール、バドミントン、野球、陸上）と文化系3つ（茶道、音楽、アート）の計8つで構成される。入部については1年更新で、生徒たちは好きな部活動に1年毎に自己選択し、任意で参加することができる。

部活動の大きな目的としては「余暇の充実」という部分が大きく、一般企業への就労を目指す生徒たちを支える1つとしての取り組みである。令和6年現在、生徒の8割以上は入部している状況にある。

III 本校サッカー部について

本校サッカー部は、開設して8年目になる。1年生2名、2年生3名、3年生4名の計9名で構成されており、サッカー経験（昨年度から引き続きの入部者も含め）がある生徒が8名、未経験者が1名となっている。多くの生徒がサッカーに対する興味・関心が高く、意欲的に練習に臨む姿が見られる。練習がない日にも、近隣の公園で練習する生徒やプロの試合やトレーニング

グ動画などを見て研究している生徒がいる。また、部活動以外にクラブチームにも所属している生徒もいる。その他卒業生の存在も大きく、定期的に部活動の練習参加、大会参加（条件を満たす大会）をしてくれている。

技術面においては、全体的にトラップやシュート、パスなど1つ1つの動作について「止める」「蹴る」の基礎が身に付いていない生徒が多く、自分の考えた場所へボールを蹴ることが難しい。また、精神面については、感情のコントロールが苦手な生徒や正しい受け止めをできない生徒も在籍しているため、日々の練習の中ではチームサポートを大切にしており、前向きな言葉かけを生徒間で行えるよう、日頃支援を行っている。



〈写真 大会パンフレット参照〉

IV 調査の概要

1 回答校と回答者

アンケートに回答していただいた学校は、第2回全国特別支援学校フットサル大会へ参加した特別支援学校計9校である（下記参照）。

- ・ 国立札幌みなみの杜高等支援学校（本校）
- ・ 栃木県立特別支援学校 宇都宮青葉高等学園
- ・ 横浜市立日野中央高等特別支援学校
- ・ 富山県立富山高等支援学校
- ・ 愛知県立名古屋聾学校
- ・ 奈良県立高等養護学校
- ・ 香川県立香川東部支援学校
- ・ 大分県立さくらの杜高等支援学校
- ・ 福岡県立特別支援学校「福岡高等学園」

2 調査期間

令和6年10～12月の期間でアンケート調査を行った。

3 調査内容

アンケート調査の内容としては、①部活動に関する基本情報（顧問数、部員数、指導体制等）、②部活動の活動状況や運営状況（練習頻度、活動時間、運営する上での課題等）、③部活動と学校生活のつながりの部分について（部活動が生徒に与える影響等）、を中心に各校の部活動の現状、成果と課題等を把握できるような内容を考え、アンケート内容を構成した。

4 分析方法

各校へのアンケート調査結果を集計しながら、その傾向をまとめていくのに加え、本校の部活動との比較を行い、検証を行っていく。

V 調査結果と考察

1 部活動の関わる基本情報について

(1) アンケート結果

アンケート① 部活動の設立年について

学校名	横浜	富山	宇都宮	札幌	香川 大分	奈良 福岡	名古屋
設立年	S59 (1984)	H25 (2013)	H28 (2016)	H29 (2017)	R4 (2022)	不明	不明 (約10年前)

アンケート② 部活動担当（顧問）の人数と担当年数について

学校名	札幌	宇都宮	横浜	富山	名古屋
顧問人数	4名	5名	7名	6名	8名
経験年数	7-6-6-1	5-2-2-1-1	8-8-5-4-3-3-2	7-7-7-1-1-1	5-4-2-1-1-1-1-1

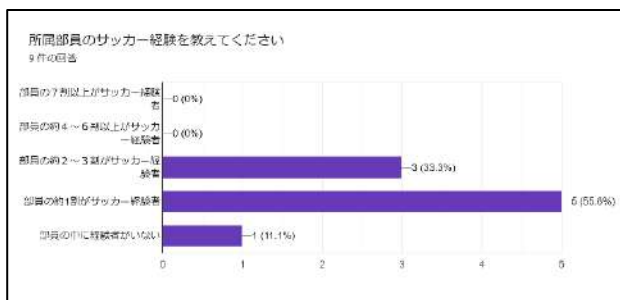
学校名	奈良	香川	大分	福岡	奈良
顧問人数	3名	23名(2名) ※競技部担当	5名 ※運動部担当	6名	3名
経験年数	12-2-2	3-3 ※フットサル担当	3-3-3-3-2	11-4-2-1-1-1	12-2-2

アンケート③ 現在の部員数について

学校名	札幌	宇都宮	横浜	富山	名古屋
高3年	4	8	6	5	1
2年	3	8	7	3	4
1年	2	5	4	1	10(1名マネージャー)
中学	0	0	0	0	4(中2)
合計(女子)	9名(0)	21名(0)	17名(1)	9名(0)	19名(5)

学校名	奈良	香川	大分	福岡	奈良
高3年	4	6	3	1	4
2年	1	6	4	3	1
1年	5	9	1	7	5
中学	0	1(中3)	0	0	0
計(女子)	10名(0)	22名(8)	8名(0)	11名(0)	10名(0)

アンケート④ 部員の経験年数



アンケート⑤ サッカー部以外の部活動について



(2) 部活動の基本情報への考察

はじめに部活動の名称として、サッカー部やフットサル部という呼称ではなく「競技部（香川東部支援学校）」や「運動部（さくらの杜高等支援学校）」という名称とし、練習内容をサッカー・フットサルに限定することなく活動している学校がある。補足すると香川東部支援学校では、「競技部」としてシーズンスポーツに取り組んでおり、フットサルを始めたのは2022年で全国特別支援学校フットサル大会の開催がきっかけであるとのことだった。また、さくらの杜高等支援学校では、運動部と文化部という2つの部活動があり運動部ではバスケットボール、サッカー、陸上競技を中心に行っている。

アンケート①からは多くの学校で設立から10年未満の部活動が多く、部が設立し、比較的新しい学校が多いことがわかる。

部員に関わる内容としてはアンケート③からわかるように、約半数の学校が部員11人以下であるという結果だった。また各学年によっても部員数に差があり、安定した入部環境がないことが想定される。さらに本校の実態とも重なる部分として、アンケート⑤からわかるように、サッカー部以外の多種多様な部活動を設置している学校が多いことから、他の部活動を選択す

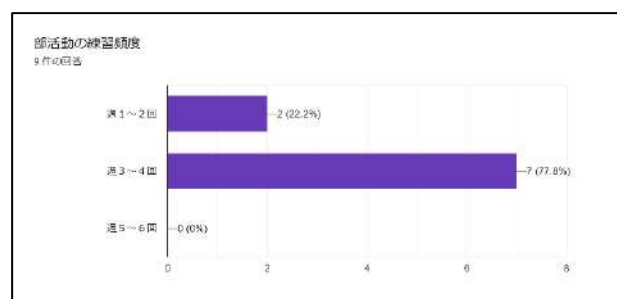
る生徒が増え、部員の確保がより難しくなっていることが一つの要因となっているのではないかと予想される。

部員数が少ないことについては、サッカー大会（11人制）への単独で出場することが困難となること、また練習を行うにあたって、実施できるメニューが限定されてしまい、ゲーム形式のトレーニングを行いにくいなどの課題が出てくること等も考えられる。一方、1チーム5名で実施できるフットサルであれば、上記の課題をクリアでき、大会参加などもしやすい。現在の部活動運営状況を踏まえると活動しやすいフットサルは今後も継続して魅力的なスポーツの1つとなることが考えられる。

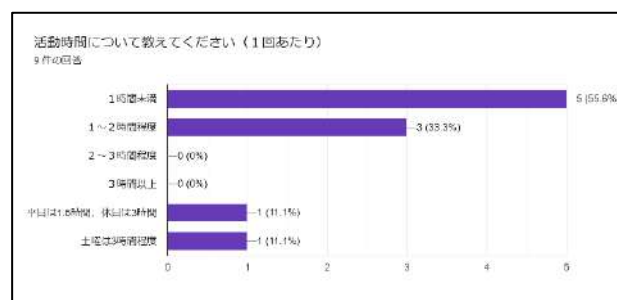
2 部活動の活動状況について

(1) アンケート結果

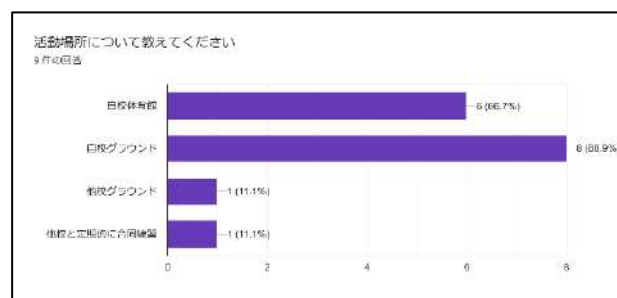
アンケート⑥ 部活動の練習頻度



アンケート⑦ 活動時間



アンケート⑧ 活動場所



アンケート⑨ 主なトレーニング内容

学校名	札幌	宇都宮	横浜	富山	名古屋
練習内容	基礎技術 ゲーム形式	技術練習 ゲーム形式	技術練習 フィジカル ゲーム形式	技術練習 フィジカル 戦術練習	技術練習 フィジカル 戦術練習

学校名	奈良	香川	大分	福岡	奈良
練習内容	技術練習 ゲーム形式	基礎技術 戦術練習 ゲーム形式	ゲーム形式	基礎技術 ゲーム形式	技術練習 ゲーム形式

(2) 部活動の活動状況についての考察

アンケート⑥・⑦より練習頻度としては週3～4回の練習を設定している学校が多く、活動時間としては1時間未満と限られた時間で練習を行っている学校が多い。アンケート⑧にある活動場所については、自校のグラウンドや体育館を主に使用しているが、施設の制約により十分な練習環境が整っていない学校もある。部員数の少なさなども鑑みると地域や他校との連携を図り、練習場所を確保し合同で練習などを計画していくことも重要であると考えられる。

アンケート⑨からは基礎技術・ゲーム形式の練習内容を行う学校が多く戦術練習など、より専門的な練習まで行っている学校は少ないことがわかった。また、部活動の基本情報に関わるアンケート④の結果から、サッカー経験のある生徒が少なく、そこから基礎技術の習得に時間がかかる傾向があることがわかる。活動時間や生徒の実態（経験者が少ない、部員が少ない）等の現状を踏まえ、練習内容としては短時間で効果的なトレーニングメニューの作成や、初心者が少しずつステップアップしていくための個別指導・支援を行い、やすい環境で練習を行っていくことが望ましいのではないかと考えられる。

3 部活動運営について

(1) アンケート結果

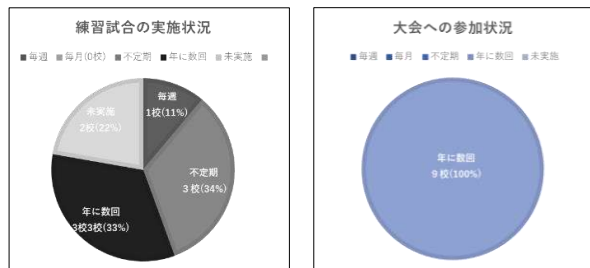
アンケート⑩ 指導体制について（外部コーチ有無等）

	顧問のみ	外部を活用している
回答数	9校	0校
割合	100%	0%

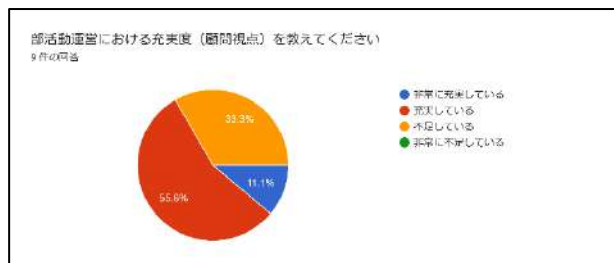
アンケート⑪ 協力体制について（保護者会、OB会、地域のサポート等）

	保護者会	OB会	地域	他校	連盟	特になし
回答数	1校	3校	2校	1校	2校	2校
補足	練習参加	練習参加	・クラブチーム ・企業から用具寄付	女子高校との交流	・サッカー協会 ・フットサル連盟	

アンケート⑫ 練習・大会への参加頻度



アンケート⑬ 部活動運営に関する充実度



アンケート⑭ 部活動指導の課題

- 出張時の顧問の確保
 - 練習会場が狭い
 - 指導時間の短さ
 - 部員の確保
 - 現場実習等で大会参加できない生徒がいる
 - 指導者が少ない
 - 練習機会の少なさ
- ※他部活動との場所かぶり、顧問の会議、部活動規定の範囲内での練習計画などの理由から

アンケート⑮ 改善を図りたい内容

- 専属の指導員が必要
- 練習機会の確保
- 活動時間を増やしたい
- 初心者が多いため、経験者に合わせた練習内容になっていない部分
- 練習内容の工夫によりもっと活動を充実させたい
- 年間を通じて全員参加できる試合の機会をつくりたい
- 校内部活動規定の改善
- 栄養の知識を教えたい（お菓子を食べる生徒が多い）
- 技術指導を高めたい（キックの質等）

アンケート⑩ 外部からの支援や期待すること

- ・外部コーチの指導
- ・今の状態で十分
- ・環境整備（グラウンドの人口芝化など）
- ・障害者サッカーの普及
- ・コーチ、見守り支援
- ・フットサル、サッカーの専門的な技術指導
- ・外部講師の活用

いきたい

- ・与える影響は大きい。大会など目標があることで、生徒のモチベーション成長にもつながる
- ・時間的な負担が無いわけではないが、同時に強いやりがいも感じている
- ・生徒の実態に差があるので、それぞれに応じた指導ができるように複数人の指導者が必要だと思う

アンケート⑪ 今後の部活動運営に期待することについて

- ・外部指導員の導入
- ・練習機会の確保
- ・学校生活の活性化
- ・外部からのサポート
- ・指導体制の確立
- ・部活動での経験が日常生活に般化されること
- ・生徒の人的成長
- ・高等部での部活動の参加を通して生涯スポーツへ関わっていける体制づくりを目指していきたい。また部員が増えて競争意識が芽生える。仲間への思いやりのある言葉かけができるようになる。全国大会に出て日本の仲間と出会い刺激を受ける
- ・顧問は多いが、負担が偏っているので、負担が少し減るといいと思う。練習時間を確保できるとよい

(2) 部活動運営に関わる内容(顧問視点)の考察

アンケート②からも分かるように各校の部活動担当の人数が少なくても3名以上で構成されており、どの学校も複数の教員で部活動運営できる体制があることが分かる。しかし一方で、アンケート⑭・⑰から、顧問の指導スキルの差や経験のばらつきが課題としてあり、指導できる顧問が固定化してしまうことにより、担当者の負担の偏りが出てくるといった問題も同時に生まれている。

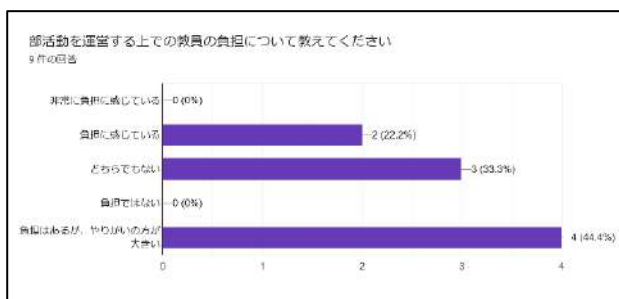
指導体制については、9校すべてが「顧問のみ」で指導を行っているという回答があり、外部を活用した指導体制は行っていないという結果となった。協力体制については、OB会を活用している学校が多く、その他近隣のクラブチームや女子高校との交流を行っている例もある。

上記の例のように、外部支援として期待していることの1つに外部コーチの導入がある。アンケート⑩からも本調査の中では、外部を活用した指導体制をとっている学校は1校もなく、顧問だけで指導を行っているという現状がある。外部コーチからの専門的な技術指導を受けることで、生徒のスキル向上や顧問の負担軽減が期待されていく一方で、導入までに至っていない現状があるため、その部分の改善・移行につながる手だてについても検討していく必要があると感じる。

これまで触れてきた内容も踏まえ、部活動運営に関する充実度については、アンケート⑬からも約半数以上の顧問が充実していると回答している。

部活動指導における課題については、アンケート⑭から主として環境に関わる事項がほとんどであった。具体的には、練習時間や場所の確保、練習の質をより向上させるための外部講師の活用等である。これらについても、地域連携・地域移行も大きなポイントとして学校外の地域等の力も借りながらの運営方法を探っていくことが部活動をより充実させていくことへつながっていくと考える。

アンケート⑫ 部活動運営に関する教員負担



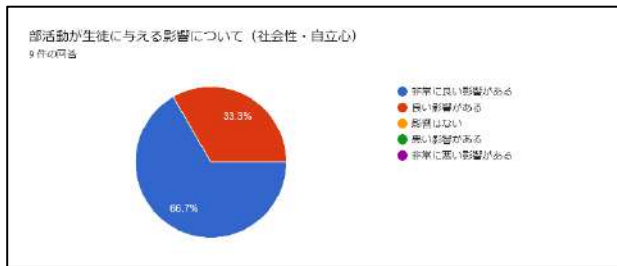
アンケート⑬ 部活動に関わる部分について感じていること

- ・部活動は本校の生徒にとって人格の形成に非常に大きく関わる活動である。また卒業後の社会参加に向けて必要な力をつける場所である。そういった意義を感じながら先生方が指導に関わるので、子供たちの変容も大きい。変わらず続けられる体制を取れるようにして

4 部活動と学校生活のつながりについて

(1) アンケート結果

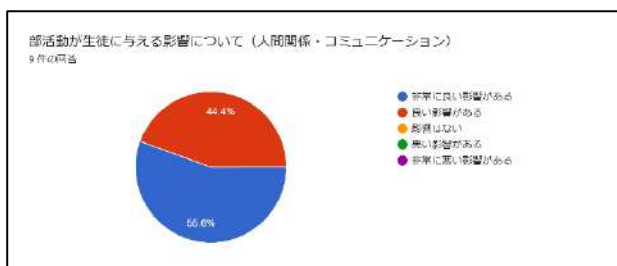
アンケート⑱ 部活動が生徒に与える影響（社会性・自立心）について



アンケート⑳ 上記質問の具体的な状況について

- ・集団活動を通じて、マナー・協調性が身につく
- ・挨拶や身だしなみを整えること、練習準備、片付けが自発的に行えるようになる
- ・コミュニケーションの向上（心身ともに健康に人間関係を深める）
- ・人への思いやり、協調性、向上心、粘り強さ、レジリエンス力の成長が期待できる
- ・挨拶、返事、話を聞く力や人間関係形成能力、精神力の向上
- ・学校生活、寄宿舎生活を行う上で、リフレッシュできる機会となっている
- ・学校生活全般（1つ1つ）への取り組む意識が変わる
- ・目標に向かってみんなで切磋琢磨できる
- ・道具の事前準備、練習場へ自力で通うために公共交通機関を事前に調べるなど、サッカーを通じて自発的に行動を促せる点。社会性が少しずつ高まっている。

アンケート㉑ 部活動が生徒に与える影響（人間関係コミュニケーション）について



アンケート㉒ 上記質問の具体的な状況について

- ・コミュニケーション能力の向上、上司とのかかわり方、協調性
- ・話す、聴くという人間関係を円滑にするための基礎的

な力が向上している。集団の中で自分の役割に気づいて行動できるようになる。

- ・礼儀正しく挨拶できるようになる
- ・前向きなコミュニケーションを取れるようになった、相手を思いやる言動ができるようになった
- ・対戦相手、仲間、教師、保護者へのリスペクトの精神を学び、言葉遣いや礼儀作法を身に付けることができるため。
- ・周囲を思いやる言動が増えた。
- ・周りや全体を意識した行動が増える
- ・部活動を通じて学年関係なく一体感のある集団づくりができる。仲間同士の声かけも増えつつある。
- ・みんなで協力することやコミュニケーションをとることの大切さを学ぶことができる

(2) 部活動と学校生活のつながりに関わる内容の考察

アンケート⑱・㉑の結果から、部活動が生徒に与える影響については、社会性、自立心、人間関係、コミュニケーション、どの部分においても回答校すべてから「良い影響がある」という結果となった。部活動におけるチームでの集団活動を通じて、協調性やマナーを学ぶ機会が多く得られていることから、意識して周囲を見ながら行動することや練習での準備や片付けを自発的に行うことができるようになる等といった意見があり、学校生活においても活用することができる良い学びへとつながっていることがわかる。

またコミュニケーション面においても、チームメイトや顧問とのやり取りを通じて、前向きなコミュニケーションが増加し、他者への思いやりや尊重の精神が育まれているといった意見があげられている。これらの内容は、公益財団法人日本ライオンズの大会基本コンセプトである「自立」「RESPECT」へつながる内容が多く、生徒が主体的な判断をするために必要となる要素（聴く力、向上心、周りや全体を意識する等）、そして他者に対する温かな思いやりのある行動をするために必要な要素（挨拶や返事、協調性、言葉遣い等）が部活動を通じて学び、育まれていっていることを指導者である顧問が感じていることがわかる。

さらに、全国大会など外部のイベントへの参加は、生徒たちの新たな視野を拓き、他校との交流を通じて多くの刺激を受ける貴重な機会となっている。部活動が生徒たちにとって今後の社会人生活を充実させるた

めの一助となっていくことは間違いないといえる。

VI 全体のまとめ

1 成果と今後の方向性

今回の調査結果を通じて、他校の部活動が抱える現状と課題について整理することができた。本校の部活動と比較して考えると、調査前の想定では総練習量に差があるのではないかと考えていた。その理由として、大会参加を通じて感じた他校生徒との違いがある。他校の生徒たちは、試合会場や宿泊場所での挨拶を含めた「ふるまい」が非常に素晴らしく、日常生活における意識の高さが際立っていた。また、技術面ではフットサル特有の戦術を活用して試合に臨むチームも多く、技術的・戦術的な面での「差」を実感した。

そのため、総練習量の違いがこうした差を生み出しているのではないかと考えていたが、今回の調査結果では、各校の練習頻度や活動時間、部員の経験値に大きな差がないことがわかった。このことから、本校での今後の取り組みでは、練習内容の「質」に注目し、さらに学校生活との結びつきを強めることで、慣れた環境以外でも意識や姿勢を持続させる力を育む必要があると実感した。

また、部活動運営における大きな課題の1つとして「顧問の負担」が挙げられるが、アンケート調査に協力していただいた顧問の多くは、「どちらでもない」「負担はあるがやりがいの方が大きい」と回答しており、部活動指導に前向きな意識をもつ先生が多いことがわかった。しかし、担当者に負担が偏ることへの懸念も寄せられており、本校においても練習を担当する教員に負担が集中することがある。そのため、平日の校内練習では他の顧問との連携（合同練習）、休日は他校との連携を図り、練習機会を確保する努力を続けている。このように、部活動担当者以外との連携が重要であることを改めて認識した。さらに、生徒が自主的に進められるトレーニングメニューを作成することも、顧問の負担軽減につながると考えている。平日の部活動では授業終了後すぐに短時間のトレーニングを行うことが多く、顧問は部活動以外の生徒対応や会議への出席にも時間を割かなければならない現状がある。そのため、指導経験の少ない顧問でも見守り程度で進行できるメニューを考案し、生徒主体で進められる環境づくりを進めていきたいと考えている。この取組は、アンケート結果で期待されていた「部活動顧問負担の平均

化」や「生徒の人的成長」「指導体制の確立」にもつながることが期待される。

今後はこれらの課題と提案を実践に移し、さらに充実した部活動運営を目指していきたいと考えている。

2 課題

今回の研究における課題としては、調査方法に改善の余地がある点が挙げられる。全国の特別支援学校を対象にした今回の調査研究は、調査対象となる範囲が広くなることで、各校の地域性（都市部・地域部）や障害種による違いなどに迫ることが難しい結果になったと感じている。また代表顧問へのアンケート調査に限定したことで、全体の傾向よりも個々の顧問の主観が研究内容に反映されやすいという課題も浮かび上がった。このような課題を克服するためには、各校から複数の顧問に回答を依頼し、より具体的で多角的なデータを収集することが重要となる。これらの気づきを次回以降の研究の参考にし、より深い考察が可能な調査方法を模索していきたいと考えている。

3 おわりに

最後に、栃木県立特別支援学校宇都宮青葉高等学園の柳田先生、横浜市立日野中央高等特別支援学校の松木先生、富山県立富山高等支援学校の河村先生、愛知県立名古屋鷺学校の筒井先生、奈良県立高等養護学校の金坂先生、香川県立香川東部支援学校の宮本先生、大分県立さくらの杜高等支援学校の小澤先生、福岡県立特別支援学校「福岡高等学園」の奥山先生には、日々の業務でご多忙の中、アンケート調査にご回答いただくなど、本研究にご協力いただいたことに心から感謝申し上げたい。

【引用・参考文献等】

- 1) 公益財団法人日本ライオンズ第2回全国特別支援学校フットサル大会開催要項、2023
- 2) 公益財団法人日本中学校体育連盟、加盟校・加盟生徒数調査集計表、2024
- 3) スポーツ庁：令和6年度「障害者スポーツ推進プロジェクト（特別支援学校等における運動部活動の地域連携・地域移行支援事業）」の募集について、2024
- 4) NITS 独立行政法人教職員支援機構：部活動の地域連携・地域移行について、2024

キャリア教育の視点から見た部活動の実態

～本校での学びを将来の暮らしへどのように活かしていくか～

北海道札幌稲穂高等支援学校 教諭 永易 健太

I 研究背景

1 本校の部活動の実態

本校は「バスケットボール部」「サッカー部」「陸上部」「美術部」「合唱部」の5つの部活動があり、令和5年度末（2023年度末）段階で運動部活動に所属していた生徒は全体の27%と低い加入率でした。そのため、大会出場に必要な人数を構成できない部活動もあり、大会の出場を断念することもありました。これまででも他校との合同チームを設立し、大会に出場することもありましたが、練習・経験不足に加え、慣れない仲間とのコミュニケーションに苦勞し、本来の実力や練習の成果を発揮できぬまま発表・活躍の機会を終えることもありました。また、各学年の加入率にも偏りがあり、今後部活動として存続・活動することが難しい状況にあることは全部活動共通の課題であり、悩みでもあります。こうした本校の実態からも、本校が定める部活動の目的（資料1）や部活動本来の目的¹⁾である「体力や技能の向上」を図るとともに「異年齢との交流の中で好ましい人間関係の構築」「自己肯定感・責任感・連帯感を育てる」環境において本校は、部活動環境において、主体的に学びを深める場としては、極めて大きな課題がある状況だということが分かりました。

北海道札幌稲穂高等支援学校 部活動細則

[目的]

- ①キャリア教育の視点から、スポーツ・文化活動を通して、責任、協力、寛容、明朗等、望ましい態度や習慣を形成する。
- ②学業意欲の高揚を図るとともに楽しく余暇を活用する体力や気持ちを育て卒業後の余暇につなげる。
- ③年間を通して活動する中で、技術・技能を高め、集団、仲間づくりを行う。
- ④各種大会や発表会等に参加し、練習の成果を発揮する。
- ⑤3年間活動することを原則とし、自ら選んだ活動を長期間やり遂げる経験を積む。

[資料1 ～本校部活動細則～]

2 学校の実態

本校は開校から14年目を迎えた石狩管内・札幌市手稲区にある通学型の公立特別支援学校（知的障がい／

単置高等部）です。本校には現在「生産技術科」「木工科」「環境・流通サポート科」「家庭総合科」の4つの職業学科が設置されており、令和6年度の総生徒数は79名と札幌市内としては小規模な学校です。本校に入学してくる生徒の多くは札幌市内及び小樽市内の生徒で、主たる障がいを知的障がいとし、協調性運動障がいや自閉症スペクトラム症候群などを併せ有する生徒も在籍しています。手稲区は人口約14万人で石狩湾に近い札幌市の北西部に面しており、市内でも極めて自然に恵まれた地域です。現場実習でも恵まれた自然を支える企業等とつながり、本校の教育活動に協力していただいています。

3 研究の土台づくり

運動部活動を主体的な学びの場として、その目的を果たすためには、現在本校で課題となっている部分は極めて大きいということは「I-1 本校の部活動の実態」にも記述したとおりです。また、本校生徒が将来の暮らしの中に「スポーツ（運動）」を取り入れ、より健康で豊かに暮らすことができるようにしていくためには、在学中にスポーツの大切さや将来の暮らしとスポーツとの関わりが重要性であることを理解する必要があると考えました。そこで、本校の運動部活動の環境を見直し、以下3点の課題を分析しながら環境を整えていくことができないかと考え、本研究を開始しました。

(1) 部活動・同好会規定

本校では、生徒の安全保障、指導者確保の観点から「部活動は5つまで」という規定に則り、開校から今日まで部活動の在り方や部活動数の増減については、変化することなく現在に至っており、既存の部活動に興味のない生徒たちの希望を叶えるには難しい環境がありました。そこで、部活動の休部・廃部・昇格、同好会設立に関わる規定を見直し、生徒の興味関心に合わせて、より高校生らしく主体的な活動ができるように整備することとしました。今後は、学校組織・担当部署として生徒の主体的な活動を部活動という活動の場の中で支えられるような環境を設定していくことを目標

としています。

(2) 大会出場に関わる規定

本校では、1チームを構成するに満たない、または競技人数ギリギリの部員数である部活動があり、大会出場に関わっては競技人数を満たすことが第一関門となるケースがほとんどです（本校の場合は「バスケットボール部」「サッカー部」が該当する）。その場合には、他校との合同チームを設立し出場することも可能ですが、先述したように練習・経験不足に加え、他校との能力差や偏りから競技を行う上で安全面から見ても懸念されることが多くありました。そこで「部活動に加入していない本校生徒及び他の部活動に所属している生徒」、つまりは全校生徒を対象として参加を募り、出場することを可能とすることで、大会出場に関わる第一関門を突破し、部活動の目的を達成できるように取り組みを始めました。

(3) 部活動費(生徒会費)の扱い

本校の部活動費(生徒会費)の扱いとして、主に消耗品・備品にのみ支出できることとなっています。が、開校14年目を迎え、現在の生徒数の規模やこれまでの環境づくりにより、部活動に必要な備品は概ね揃っていることから、支出項目の縛りや上限についての検討と弾力的に支出できる、または、部活動間で支出調整ができるシステムを再構築していく必要性を感じています。また、大会に関わる費用を捻出できずに参加できない選手も少なからず存在し、一家庭の状況がチーム全体に影響を与えてしまうということもありました。そういった課題を解決・軽減していくためにも、各方面からの理解・協力を得ながら支出調整を弾力的に行える工夫が組織として必要になってきています。それらを改善するために部活動顧問会議を部活動運営の軸として機能させ、生徒がより活動しやすいように金銭面や規定面を整え直していくことが現在求められています。

II 研究の内容・方法

1 内容・方法

キャリア教育で育成すべき力として「人間関係形成能力・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」²⁾が掲げられています。また、学校教育全体で取り組むべきとされ

ているキャリア教育において、学校教育の一環である運動部活動の加入が生徒のキャリア形成をどのように助長し、効果的な活動としていくことができるのかを検証した上で生徒へ還元していく必要があると考えています。そこで、全校生徒を対象としたアンケートを実施し、運動部活動に加入している生徒と未加入者などのキャリア発達の違いを分析し、本校のカリキュラムに足りないものや部活動環境として足りないものを見出し、改善に向けた取り組みを行っていきたいと考えています。また、外部講師の活用を通して、社会人としてのスポーツとの関わり方を知る・考える機会を増やししながら、将来の余暇に繋げていくための取り組みを行い、その成果を報告することとします。

2 調査経過

(1) 全校生徒へのアンケート

本校に入学してから「部活動」「保健体育」に関わって成長したと思う項目等についてアンケートを取りました。「運動部活動加入者」「文化部活動加入者」「部活動未加入者」の3つの区分に分けて統計を取り、その違いについて分析・検証を行いました。以下の表は各質問項目において「はい」と回答した割合(%)を示しています。

1) 仲間がたくさん増えた		
運動部	文化部	未加入
92%	88%	78%

2) 礼儀を学んだ		
運動部	文化部	未加入
92%	100%	66%

3) 体力がついた		
運動部	文化部	未加入
88%	71%	69%

4) 自分の長所が分かった		
運動部	文化部	未加入
58%	76%	75%

5) 自分の課題が分かった		
運動部	文化部	未加入
80%	94%	94%

6) 自分の良さを認めてもらった		
運動部	文化部	未加入
71%	82%	72%

7) 思いやりを学んだ		
運動部	文化部	未加入
63%	88%	84%

8) 仲間に助けてもらった(経験がある)		
運動部	文化部	未加入
88%	88%	91%

9) 部活動の経験は将来活かせると思う		
運動部	文化部	未加入
100%	76%	38%

10) 卒業後、スポーツを続けたいか		
運動部	文化部	未加入
79%	53%	59%

11) 卒業後、在校生と一緒に大会に出たり活動したりしたいか		
運動部	文化部	未加入
67%	30%	19%

以上の結果から本校で運動部活動に参加している生徒の多くは、未加入者等よりも「3 体力が付いた」「9 部活動の経験が将来活かせると思う」「10 卒業後、スポーツを続けたいか」「11 卒業後、在校生と一緒に大会に出たり活動したりしたいか」の数値が高く、特に「9 部活動の経験が将来活かせると思う」という項目では100%の生徒が「はい(活かせると思う)」と答えています。また、未加入者より下回っている項目は「5 自分の課題が分かった」「7 思いやりを学んだ」の2項目のみであり、このことから「自己理解・自己管理能力」において自分自身が行っていることに対する意義を感じ、今後に向けて積極的に学ぼうとする能力が養われていると捉えることもできます。また、部活動未加入者が運動部部活に参加することを選択しなかった理由として「好きな部活動がなかったから」「入りたい部活動がなかったから」「デイサービスや習い事があるから」との理由が多く挙げられてい

たとともに、既存の運動部活動以外であれば加入したいと記入している生徒がほとんどでした。特に挙げられていた運動部活動は「バドミントン部」「バレーボール部」「ダンス部」「体操部」で、記載の順に要望数が多く、仮にこの要望を満たした場合、本校の運動部活動の加入率は「60%」と在籍数の半分以上が運動部に参加することが想定されます。

(2) 外部講師の活用

保健体育の授業や部活動を通して、より各種スポーツに興味を持ってもらい、今後の競技生活や将来の余暇への繋がり、「スポーツの価値」「スポーツの楽しさ」を感じてもらう取り組みの1つとして外部講師を活用する機会を多く設定しました。令和6年度は「バレーボール」「ダンス」「フラダンス」「バスケットボール」に関わる方々を講師として招き、特別授業として下記の通り行っていただきました。

a バレーボール

区分	第1学年 保健体育(2時間)
講師	大山 未希 氏 (元プロバレーボール選手)
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・レシーブ体験(資料2-1) ・ボルトトレーニング ・パス等の基礎練習 ・アンダーハンドパス練習 ・ゲーム ・講話(資料2-2)
実績	ボールと心をつなぐスポーツであるバレーボールを通して、目標に向かう大切さや思いやりを持って失敗を恐れずチャレンジする気持ちを学びました。授業を終え、「何事にも諦めずにやりきること」「好きなことを見付けること」「全力を尽くすこと」が重要だということが印象に残っていると振り返る生徒が多くいました。また、9割以上の生徒がバレーボールという競技に対して楽しかったと感じることができ、「これからもバレーを続けたい」「バレー部を作りたい」と話す生徒もいた。



[資料2-1 ～レシーブ体験～]



[資料2-2 ～講話～]

b ダンス

区分	第1学年 保健体育（2時間×3回）
講師	MAME氏 （プロダンサー／北海道ダンスアカデミー協会／KING所属）
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・アイソレーション（資料3-1） ・基礎ステップ練習（資料3-2） ・現代的なリズムダンスの振り付け ・身体表現の方法・工夫（資料3-3）
実績	<p>学校祭の学年ステージ発表に向けた取り組みの一環として、ダンスの授業を行った。チームに分かれてそれぞれのテーマと見本となる曲とダンスを決定したのち本格的なダンスの練習に入っていました。ダンスの上手さや善し悪しではなく、体を大きく使って表現すること、自分を誰よりもアピールして表現を楽しむことを学びました。</p>

練習当初は振り付けを恥ずかしがっていた生徒も、次第に堂々と胸を張って表現できるようになり、発表の場面では全員が見事に完成された振り付けを踊りきる事ができました。発表終了後、自信が付いた生徒も多く、身に付けたダンススキルや覚えた振り付けを通常授業のウォーミングアップにも取り入れながら自身の体づくりに応用・活用することができています。



[資料3-1 ～アイソレーション～]



[資料3-2 ～基礎ステップ練習～]



[資料3-3 ～身体表現の方法・工夫～]

c フラダンス

区分	第3学年 保健体育（2時間）
講師	馬淵 いづみ 氏 （アーイナ・リノ フラサークル インストラクター）
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ハワイの文化に触れる ・基本的な動作の修得（資料4-1） ・課題曲の練習（資料4-2）
実績	本校保護者を講師としたフラダンス教室が実現しました。普段触れることないハワイの文化に触れ、新ジャンルのダンスにチャレンジすることを目的に行いました。苦手意識や照れくささがある生徒もいる中、全員が練習用の衣装をお借りし、髪飾りや首飾りを付けて行うことで生徒の気持ちが高まり、楽しく参加する様子が伺えました。「もっと色々な曲をやってみたい」「社会人になったらハワイに行ってみたい」など、前向きな感想が多く上がっていました。授業後に行われた学校祭の有志発表（自由参加）では、グループを作ってフラダンスを披露する生徒もあり、盛り上がりを見せた。



[資料4-1 ～基本的な動作の習得～]



[資料4-2 ～課題曲の練習～]

d バスケットボール

区分	バスケットボール部（2時間）
講師	野口 まゆみ 氏 （元日本代表選手）
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・フットワーク ・ゲームにおけるサイドステップ ・ディフェンス練習（資料5-1） ・烏かごディフェンス（資料5-2）
実績	大会を間近に控えた選手たちに対し、バスケットボールを通して「楽しい」「ワクワク」という感情を遊びの要素からアプローチをかけるクリニック内容で、脳内の受容体を増やしながらかつ主体的に運動能力を高める活動を行いました。ボールハンドリングでも、選手は楽しい表情を浮かべながら取り組み、実践的な練習の中でも選手からは質問や報告をする場面が多く見られるなど、学びに向かう姿勢や態度が立派でした。「楽しむ」ことが「目標を持つきっかけ」となり、選手の将来の世界観を広げることが期待できるクリニックとなりました。



[資料5-1 ～ディフェンス練習～]



[資料5-2 ～烏かごディフェンス～]



【資料5-3 ～野口氏との集合写真～】

Ⅲ 研究の考察

1 成果と課題

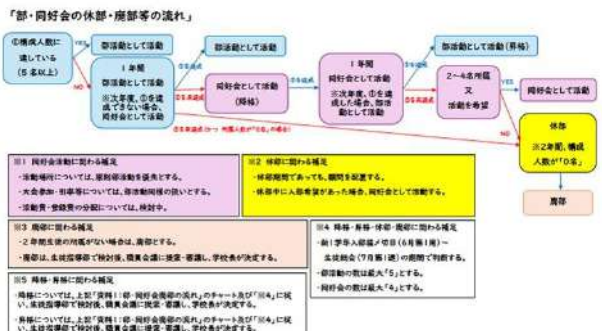
(1) 部活動環境の整備

「I-3 研究の土台づくり」で挙げた3点の課題についての分析と成果について記述します。

a 部活動・同好会規定

部活動・同好会規定について、設立から廃部までの流れを分かりやすくチャート式で整理（資料6-1、2）するとともに、各部活動の現在の立ち位置について整理することで次年度以降の活動の在り方や課題が明確となり、より本校の実態や生徒の希望、時代に合わせて改善していく必要性を文言化することができました。

また、令和6年末現在、新たな運動部活動の設立に向けた動きはありませんが、新たな文化部活動の設立に向けた動きが生徒主体で始まっています。今後、生徒自らで同好会を設立したり趣味の合う仲間とコミュニティを形成したりそれぞれが望む学校生活を自分たちの力で実現したりすることができるように引き続き、整備・改善していくことが求められています。



【資料6-1 ～休部・廃部等の流れ～】



【資料6-2 ～同好会設置までの流れ～】

b 大会出場に関わる規定

今年度改訂された規定に則り、女子バスケットボール部本部員2名に助っ人3名を加えた計5名のメンバー構成で大会にエントリーをし、北広島市総合体育館で行われた「2024 北海道 FID バスケットボール選手権大会(本戦/女子リーグ)」に出場しました(資料7)。これにより、コミュニケーション不足による弊害を最小限に抑え、校内で練習・確認された動きを大会当日に発揮することができるほど生き活きと心身の安定にも繋がりました。日頃から信じている仲間と一緒に参加できたことにより、競技運営上の安全性はもちろんのこと、望ましい集団形成に加えて責任感、達成感、充実感に繋がったことを生徒が実感できたことは大変大きな成果でした。また、サッカー部は、本部員4名に、昨年まで本校サッカー部に加入していた卒業生を1名加えた計5名で「第24回北海道チャレンジドフットサル大会(つど〜む)」「ウェルビーイングフットサルフェスティバル2024(白石区体育館)」に出場しました(資料8)。在校生にとっては、頼りがいのある先輩と一緒に参加してくれたことへの安心感に加え、卒業生との関わりが増えることで、将来の余暇活動に対する具体的なイメージを持つことができたこともキャリア形成の発達を助長することができたのではないかと感じている。



【資料7 ～単独チームで出場する女子バスケット部～】



[資料8 ～本校卒業生と出場するサッカー部～]

c 部活動費（生徒会費）の扱い

現状の生徒数では、これまでよりも部活動費に割り当てられる金額も少なくなり、更にそこから各部活動に割り当てられることで、その予算内では購入できない、支出できないものもあるということも顕在化しました。そこで部活動顧問会議と部活動予算会議（資料9）を兼ね、年数回に分けて予算調整を行っていくことが決定し、各部活動における予算計画や購入物品の優先順位などを明確にしていくことで柔軟な対応ができることが期待されます。

前年度 2月下旬～3月中旬	・来年度物品購入希望 ・予算計画・購入希望の順位付け
4月第1週	・第1回顧問会議（活動計画・部活動費予算の説明）
5月中旬	・第2回顧問会議（部活動費予算会議）
12月	・第3回顧問会議（部活動費予算調整会議） ・部活動費の残高確認し、再調整。
3月	・第4回顧問会議（決算報告、次年度の予算（案））

[資料9 ～部活動顧問会議の推進日程(案)～]

(2) 今後の展望と課題

部活動改革と呼ばれている取り組みが、特に中学校段階では足早に進められているが、保護者の経済的負担や生徒の安全確保、指導者や受け皿の確保などのデメリットを解消していくことも今後は必要となってきます。また、部活動改革が全国的に取り組まれるようになったそもその背景としては「教職員の業務削減」だと認識されている方が多くいらっしゃると思いますが、実際は「単独校で競技運営に必要な人数を構成できない」ということからです。結果として競技人数に対する費用対効果の度合いが変わり、業務量が増えているということに繋がっていきませんが、本来生徒たち

をスポーツから遠ざけるものではなく、身近なものにしようとする取り組みなのですが、地域環境上整備されていないことが大きな課題でもあります。また、社会生活上の課題が多い本校生徒たちのように、スポーツに近づけるはずの取り組みが地域に出ることで更にハードルが上がり、各家庭でスポーツ環境を整えてあげられなければスポーツからはどんどん遠ざかっていってしまうということも表面化してくる課題だと思えます。本校に入学する生徒の多くは、家庭的な制限やハンディキャップ等を理由に中学校の部活動に参加できなかった生徒も数多くいることがアンケートからも把握できました。特別支援学校の教員として、将来の暮らしを支えるための知識・技能と生徒一人一人の人生を豊かにするためにキャリア発達を促しながら、本校に入学する前までには経験できなかったことや卒業後経験するには容易ではない体験を、効果的にかつ意識的に提供していくことは、我々の責務・使命ではないでしょうか。安易に「業務のスリム化」「業務削減」「働き方改革」を叫ぶ前に、本当の意味で生徒一人一人にとって必要な教育とは何なのかを考え、学び続け、そして変化し続けていく我々の姿勢は必要だと思えます。重要なことはなぜ部活動改革が行われているのか、「スポーツの価値」を高めながら、「スポーツの価値」に気づき、「生徒自らが将来の暮らしに活かすためのツールを持ち、自身に還元できる力」を育成することであり、そのためには学校組織としても「部活動の目的」を果たすための環境づくりに尽力し、生徒が意欲的に自分の好きな競技に打ち込めるよう環境を整えていくことが求められているのではないのでしょうか。今後も生徒のために尽力し、学校組織としてキャリア形成と卒業後の豊かな暮らしに繋がるためのカリキュラムとは何かを日々検証・改善し続けることを約束し、本研究のまとめとします。

【引用、参考文献等】

- 1) スポーツ庁:運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン、平成30年
- 2) 笹川スポーツ財団研究紀要:良いスポーツ経験が青少年のキャリア形成能力に与える影響、2015年

知的障害のある生徒の運動における 「動作の意識性」へのアプローチ ～ICTを活用した運動技能の習得～

北海道千歳高等支援学校 教諭 菅 英登

I 研究の目的

1 本校の概要

本校は、平成25年4月開校し、知的障がいのある児童生徒を対象とする特別支援学校である。今年度は1学年24名、2学年21名、3学年17名、計62名の生徒が在籍しており、開校後10年を過ぎたばかりのまだ歴史の浅い学校である。学校教育目標を「志を持って社会を創る人間の育成」と定め、校訓「挑戦 Challenge 創造 Creation 協働 Collaboration」の下、生徒の卒業後の社会自立や社会参加がより豊かなものになるよう温かくより質の高い教育を実践するよう様々な取組を進めている。

2 研究の設定理由

対象：3学年 17名 男子：11名 女子6名

本校は職業学科を設置した学校であり、就労に向けて作業学習の他に、体力づくりを週4時間、体育を週2時間設定している。生徒の中には体を動かすことを苦手としている生徒も多数いる。近年、体力の低下や運動離れが指摘され、本校の生徒もその傾向が顕著である中、卒業後の肉体的かつ精神的な健康を保つために、運動習慣を身に付ける必要があると考える。これらのことを踏まえ、生徒自身が自分の体を意識して思うように動かすことができるよう成功体験を積み重ね、自己肯定感を高めるために、「運動」や「スポーツ」に対するの苦手意識を克服することによって主体的に活動できるようになるのではないかと仮説を立て、研究テーマを設定した。

II 研究の内容・方法

1 内容・方法

(1) これまでの取り組み

本校では、令和4年度から「一人一台端末」によって生徒が1台ずつ iPad を持って学習に取り組み、学校全体で Google のクラスルームを応用したICTの活用を取り入れた教育活動を行ってきた。はじめは生徒自身も iPad の操作に難しさを感じ、各教科指導におい

て操作の支援で時間を多く設定する必要があり、短い時間での操作に課題があった。しかし、次第に操作にも慣れ、活用する機会を意図的に設定することでICTの操作に時間をかけることが少なくなった。

(2) 今回の取り組み

トレーニングの継続性、漸進性、全面性、個別性、意識性の5原則の中から「意識性」に着目して、本研究を進めた。

運動する時のフォームやトレーニングがどんな意味を持っているかなどを理解し、それを行うことで、どう効率的になるのか、どこが鍛えられるのかなどを理解しながら取り組むと変化や効果は現れやすくなる。このことを「意識性の原則」という。意識性の原則を踏まえて、生徒自身が授業内容の意図や自身の動きが正しく動かすことができているかなどの運動的観点による意識性と運動に対して得意苦手と意識している精神的観点による意識性の2つにアプローチを掛けて取り組めるよう進めた。

また、授業の中でインプットした内容を生徒同士で伝え合い、アウトプット（言語化）することで、より効果的にお互いの理解が深められることから、ICTを活用した視覚的な支援や生徒同士の学び合いを通した、生徒の主体性を育めるよう取り組んだ。

2 指導の内容

生徒の実態を踏まえ、ICTを効果的に活用し、意識して体を動かすために、段階的に指導を行った。

各単元で生徒の実態や種目の特性を確認した上で、「意識改善」を進め、その苦手となる要因から「運動技能の習得」を目指し、次第に「生徒同士での対話的な活動」に発展できるよう進めた。

種目を生徒に主体性を持たせるため選択制にして、バスケットボールとバレーボールに必要なシュート、パス、ドリブルの基礎的な動きから、ゲームでの攻守の実践的な動きまで iPad を活用しながら、インプット・アウトプットにつなげるよう実践した。

自身の動きを確認したり、ポイントと見比べたりすることで、課題が明確になり、実践的なプレイにつながられるよう取り組みを進めた。また、チームプレイとして、1人の動きを自分自身だけの課題として捉えるのではなく、チーム全体で確認し意見を伝え合うことで、チーム力向上や対話を増やすことも考えて実践した。

年間指導計画と単元の内容は以下の通りである。

【年間指導計画】

実施時期	内容
4月	体づくり・体力を高める運動
5月	陸上競技（マラソン大会）
6月	生涯スポーツⅠ（ボッチャ）
7～8月	サッカー
9月	※前提実習で未実施
10～12月	選択（バレー・バスケ）
1～2月	生涯スポーツⅡ

※ 学校行事や前提実習によって、体育や体力づくりができない期間があった。

【本単元】

時数	内容
1	オリエンテーション
2	基礎基本の確認①～確認しよう
3	基礎基本の確認②～見比べよう
4	攻守の動き～少数で確認と実践
5	攻守の動き～多数で確認と実践
6	実践①
7	実践②

3 活用サイト・アプリ

(1) Google クラスルームの活用方法について

Google クラスルームでは、単元ごとにカテゴリーを作り、必要なワークシートや教師の見本等の動画教

【クラスルーム】



【課題+資料】



材を活用した。

このクラスルームでは、3年間を通していつでも生徒自身が資料を確認したり、課題の提出やアンケートを回答したりすることができるように進めた。これは生徒が学習の積み重ねをいつでも確認でき、自身の成長の過程や授業のポイントを振り返ったりすることができることを意図した。また、授業中、教師が生徒全員に個別で指導支援に当たる際に、指導にばらつきが出てしまうことを想定し、動画教材を用意した。そのため、コミュニケーションが苦手な生徒自身が授業内で質問をすることができなかったとしても、質問箱を設けるなどして支援することができた。

(2) iPad の使用方法

iPad では、主に標準機能の『カメラ』を使用して生



徒が自身の動画を撮影したり、友達に撮ってもらったものをスローで再生したりなどして、手本やポイントを比べ、それぞれの課題を見つけるなどして活用した。

4 指導の過程・記録

3学年の生徒たちは、体を動かすことに興味・関心を持って取り組むことができるようになってきた一方、学習中上手くできないことに対して、どうやって解決すればいいのかわからなくて諦めたり、情緒が乱れると仲間への言葉遣いも乱れたりする様子も時折見受けられた。

様々なスポーツに取り組む中で生徒一人一人がスポーツを通して、楽しさを知る他にも、生徒同士や教師と生徒間での言葉遣い、関わり方、自己課題に対しての向き合い方の改善を図った。また、ルールやマナーの理解定着を図ることで、卒業後の私生活・社会生活をより良く築くことにもつながっていくと考えられるため、卒業後を見通した生徒たちの運動習慣の確立や言葉遣い、他者との関わり方についても指導を行った。

(1) ≪ 意識改善 ≫

①ねらい

- ・運動に対する苦手意識の改善
生徒自身の自己課題の理解
- ・自身の課題を見つける
改善方法を模索し、成功体験を積み重ねる。

②意識改善での指導工夫

【運動的観点からの意識性】

a 撮影した動画での確認

自身の動きを iPad で確認し、スロー再生にするなどして細かく何が違うか、視覚的に確認することができた。

はじめは自身の動きを見ても何が良くて何が悪いのかわからないと答える生徒もいたが、教師と一緒に動画でポイントを確認することで自身の課題を考えることができた。特にスローで再生・停止をすることによって動きを視覚的に認知して理解することができるようになった。また、再現するまでに時間の必要な生徒については、丁寧に動画で確認することができ、次第に生徒自身が自ら課題を探したり解決しようとしたりする積極的な姿が増えた。



※ 生徒が撮影した映像から一部抜粋。

b スペシャリスト

7月ごろに千歳市の社会福祉協議会から協力を受け、基本的な技術指導をしていただいた。専門性のある方々から指導を受けた後に、生徒へ「次は皆さんが教える番になります」と伝え、「動作を言語化すること」や「スポーツを伝える・教える楽しさ」の大切さについて説明し、今後の授業でも取り組んで行くことを確認した。



具体的には、各単元や種目で、生徒が前に出て、その分野の「スペシャリスト」として手本や説明をしてもらう生徒を指名した。基本的に運動が得意な生徒の他に、「この種目は得意」「特定の動きが上手」など、運動を苦手としている生徒にも「この動きは上手いから皆の前で説明できる」「次は自分が選ばれる」といった自己肯定感や参加意識を高めながら、生徒自身が仲間へどう伝えればわかるのか、何て聞いたら良いのかなど考えたり質問したりする様子が増えた。

【精神的観点からの意識性】

a 小さい成長も大きく褒める

イメージ通りにできなかつたり、友達と自分を比べてしまったりする生徒も多くいたため、教師側で生徒一人一人の課題を認識しながら、教師側も必要に応じてフォローアップを行った。また、ただ声掛けを行うだけではなく、次にどうすればいいか考えさせることで、生徒自身が考えたものを取り組むように促し、「自

分の力で改善できた、上手くなった」と自己肯定感を高められるよう進めた。

(2) « 運動技能の習得 »

①ねらい

- ・基礎・基本的な技術を習得する。
- ・自分の体の動かし方について確認しながら理解する。
- ・改善に向けて取り組み方法について考える力を養う。

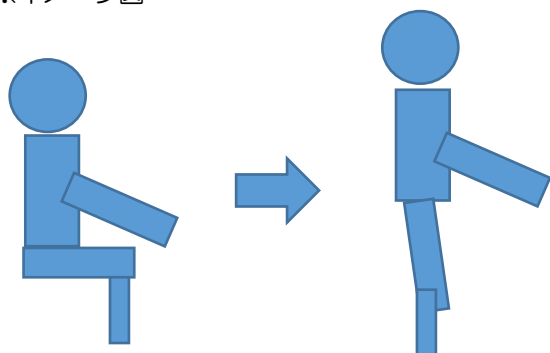
②基本的な技能での指導工夫

上記の意識改善で行った「動画で動きを確認すること」をしても、「頭では分かっているけど動きがずれてしまう」といった生徒に対して、各種目について日常的動作に近いものと関連付けて動作のイメージを持たせ、動作の意識やイメージが持てるよう指導を行った。

例) アンダーハンドパス

両手の形などはすぐに目で見てマネすることができ、四肢先から体幹に近くなると動かすことが難しい様子が見られた。両腕の固定や膝の曲げ伸ばしといった連動させた動きに難しさがあったため、椅子に座った状態から立ち上がるだけの日常的な動作とパスを返すといった運動的動作との同一性を確認し、何度か繰り返し行うことで理解が深まり改善される様子が見られた。

※イメージ図



③ゲーム形式での指導工夫

以上のような基本的な技能指導を行った後は、ゲーム形式の指導を行った。ルールについては、実際の部分練習やゲーム中に適宜説明を入れながら指導をした。

ゲーム形式の指導を行うにあたって重要視したことは、生徒全員がお互いに協力し、ゲームに参加することである。基本的な技能の習熟度も実態差があったため、段階的にルールや人数を変えてゲーム練習を行っ

た。

(3) « 生徒同士での対話的な活動 »

①ねらい

- ・基本的な技能をインプットした内容から生徒同士でアウトプットし合うことで「分りやすく相手に伝える」だけでなく「自己課題も言語化する」ことができる。

②生徒同士での対話的な活動での指導工夫

a バディシステム

基本的には二人一組で学習を行うが、実際の運動活動中に「お互いに助け合う・教え合う・深め合う」ことを前提にした取組を行った。

はじめは運動が得意な生徒と苦手な生徒でバディを組ませ、一方が技能についての「聞き方」を学び、もう一方が「伝え方」を考えさせる。必要に応じてバディを変えながら、全員が「聞き方」と「伝え方」を体験し、常に無意識化でできるよう定着することをねらいにして進めた。

b 練習やゲーム間での話し合い

授業の後半になってくると、個人練習よりも複数で取り組む練習を基礎練習の中に多く設定した。iPadで録画した動画で鍛えた「見る力」を動画から実際の動きを見て読み取る力へと昇華する為に、ペアでの順番やローテーションで待っている間に「今のプレーはどうすれば上手くいくのか」「どんな声掛けやフォローが必要なのか」などについて考えながら生徒同士でお互いを見るように促して進めた。これらの取り組みから、対戦相手が教師の時には「どうしたら勝てるのか」という課題意識をもって取り組む姿勢が見られた。ゲームの間の休憩中に生徒同士で話し合ったり、ゲーム中にお互いに声を掛け合ったり、生徒同士が指摘し合う様子が以前に比べて見られるようになった。



V 考察

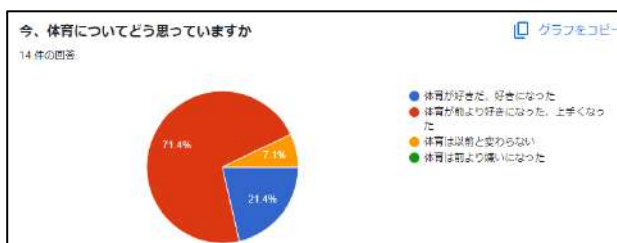
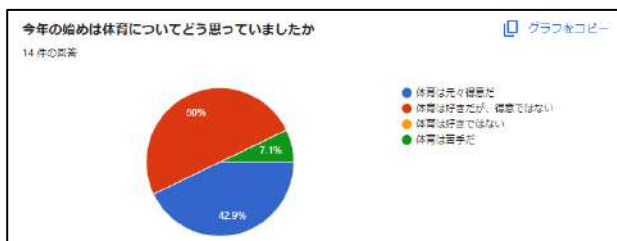
1 成果

本研究の成果として、トレーニングの5原則の中の「意識性」へのアプローチに対して、ICTを有効に使うことができた。授業を通して、生徒自身の体の扱い方がより巧みになったことが、今年度のはじめに比べて大きく変化したことがわかる。iPad を授業内で活用することにより、効果的に自分の変化を「見て」「知って」「考える」ことができ、昨年度よりも基礎練習でつまずきが少なかった。また、生徒同士で動画を撮り合ったり、その種目が得意な生徒やその動きが苦手な生徒と話し合ったりすることで、共同的な学習を行うことができた。

運動的意識の観点では、今年度のはじめに比べて、自分の動画を確認して、課題が何なのか考察して取り組むことができる生徒が増えてきた。

精神的意識の観点では、初めて行う種目や苦手な活動にもチャレンジする生徒が増えており、特に運動が苦手な女子生徒が、積極的に授業に取り組む様子を見せるようになった。

【意識調査のアンケート】



意識調査のアンケートを実施し、今年度のはじめに「体育が苦手だった」「体育は好きだが、得意ではない」が半数を占めていたが、現時点で「体育が前より好きになった、うまくなった」と回答している生徒が増えていることから、今年度の当初よりも改善されていることがわかる。

また、運動技能の習得の観点からは、アンケートの回答で「前よりも自分の動きを意識してコントロールできるようになった」「iPadの動画で確認することで、自分の課題が見てわかるようになった」など具体的な

回答が得られ、授業の様子から基本的な技能の習得の他に新しい課題に向けて自己の課題を解決しようとする取り組みが積極的に見られた。

生徒同士の対話的な活動という観点では、はじめはどうやって意見を伝えて良いのか、自分から話すのは自信がないなどという様子も見られたが、教師の方から良かった部分を取り上げて、話し合いを始めることで「カバーに入るのをもう少し早くしてみよう」「セッターに返せるようにレシーブは体を向けよう」など、少しずつ会話が広がっていた。単元の後半では、実践的に動きの確認をしているときにも、意見を伝え合う場面が増えており、仲間のミスに対しても好意的な言葉掛けのフォローをするなどして、生徒同士の雰囲気をよくしようとする様子も見られた。

2 課題

自身の動きを確認して、お手本や資料と見比べて自分の動きを意識的に修正する力が身に付く一方で、具体的に自身の動きを改善しようと取り組んでいても、自身で改善できているのか分からないため、誰かに評価をもらうか、動画でもう一度撮影して確認できるまで分からないといった技能の定着までに時差が起ころうことがあった。また、生徒の障がいやの程度、実態や育った環境によって身に付いた感覚に対するアプローチについては、より個別の指導支援を充実させていかなければならない。一斉授業におけるそれぞれの教師の専門的知識・指導力や学校によって用具の充実にはばらつきがあることが、生徒の運動能力の向上については、大きく影響すると考える。

生徒同士のコミュニケーションでは、動きを言語化して相手に伝えて教え合うには、生徒の実態差から発言する生徒に偏りが出てしまった。また、個々の運動技能は大きく改善されているが、団体競技のような戦術や複雑な動きが関与するものになると、基本的な技能と理解が結び付かず、難しさを感じて参加に消極的な様子が見られた。

屋外スポーツ（サッカー）では、実際に生徒たちがiPadを持ち出して撮影した後に保管場所や屋外の明るさから動画の視聴のしづらさやタイミングに難しさを感じた。複数の教員が個別に指導を行う場でICTを活用するなど、環境の選択や整え方、部分的な練習や種目にICTを導入するなど、ICTを使用することが授業の目的になることに注意をして、使用する場面と行

う種目や教育的目標を考慮して、利用していく必要があると感じた。

Google クラウドの課題としては、クラウド内への送信するデータ容量や収容できる容量に限りがあり、長期での保管が難しいことが考えられるため、計画的にデータを管理する必要性がある。

3 今後に向けて

近年、子どもの体力低下が社会問題化する中、国や自治体の教育委員会は課題を洗い出し、対策を打ち出している。子どもたちの運動の二極化傾向が目立つ中、運動が苦手とする子どもの要因の一つに学校体育が影響していると考えられる。周囲の目を気にして、うまくできないことが恥ずかしいと思い、体を動かすことが嫌になるケースが該当すると考えられ、体力測定の練習会を開いて数値を伸ばす学校もあるが、最も大事なことは子どもが運動を好きになり、適切な運動習慣を身に付けることではないか。それは大人になったときの健康生活に大きく影響を与える恐れがある。運動の苦手意識の克服には、モチベーションや知識向上などの学校での取り組みが重要になることを踏まえ、社会に出る前の高校生活で少しでもスポーツに携われる習慣を身に付けられるよう今後も指導に尽力していきたい。

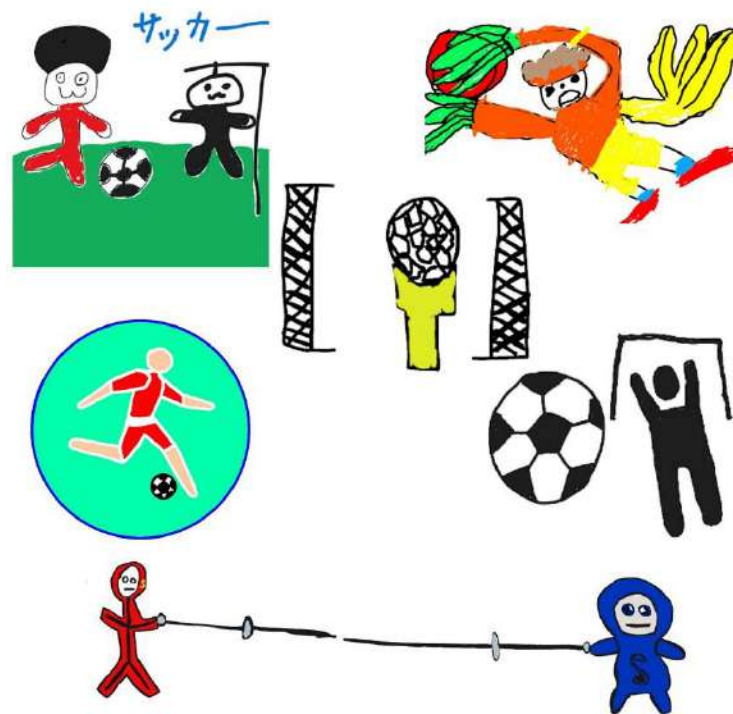
【引用・参考文献】

- 1) 岩井祐一：知的障害特別支援学校高等部における ICTを活用した体育授業における実践 一体カテストアプリと Ai アプリの活用を通して一、発育発達研究 第96号、2024
- 2) 岸下彩乃：ICT及び視覚支援を用いた部活動指導の工夫と実践～バスケットボール部の指導実践～、公益財団法人明日佳パラスポーツ研究成果報告書 No.7、2023
- 3) 金間大介：先生、どうか皆の前でほめないでください。いい子症候群の若者たち、東洋経済新報社、2022

【協力】

本校 体育科担当教員一同
3学年体育担当

発行日	令和7年3月
発行	公益財団法人明日佳 理事長 小野寺 眞 悟
印刷	北海道小樽高等支援学校



デザイン

北海道手稲養護学校三角山分校

高等部3年 (表紙・裏表紙) 落合楓雅、加藤遼基 (裏表紙) 伊藤聖矢

高等部2年 (表紙・裏表紙) 小間琉聖

高等部1年 (表紙・裏表紙) 東峰綾杜